

# 日本地質学会 *News*

Vol.20 No.9 September 2017







2018

第9回

# 惑星地球 フォトコンテスト

Earth and Planetary Photography contest

## 作品 募集中

ネット投稿・郵送投稿可能

地球の自然美 Native Beauty of Earth

ジオパーク Geopark

岩石 rock

地層 stratum

化石 fossil

大陸 continent

海洋 ground

最優秀賞 賞金 5 万円

優秀賞 賞金 2 万円

地質学会会長賞 賞金 1 万円

ほか

締切

2018.1.11 (thr)

(注) 郵送は同日必着

<http://photo.geosociety.jp>



# 日本地質学会 *News*

Vol.20 No.9 September 2017

The Geological Society of Japan News

一般社団法人日本地質学会

〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル 6F

編集委員長 小宮 剛

TEL 03-5823-1150 FAX 03-5823-1156

main@geosociety.jp (庶務一般)

journal@geosociety.jp (編集)

http://www.geosociety.jp



## Contents

### 一般社団法人日本地質学会2018年度代議員および役員選挙について

2018年度代議員および役員選挙実施要領/代議員選挙にかかわる、正・副会長候補者の意向調査について/選挙の種別/選挙のスケジュール/立候補届け(代議員)/選挙規則/選挙細則/選挙管理委員会規則 ……2

### 2018年度一般社団法人日本地質学会各賞候補者募集について

各賞選考規則/選考委員会規則 ……10

案内 ……13

第15回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム/赤磐の地球史研究所開設記念事業

公募 ……13

東京工業大学理学院地球惑星科学系教員の公募(助教)/信州大学理学部助教(特定雇用)公募(主担当:理学部理学科物質循環学コース 地球システム解析分野)

各賞・助成 ……14

2018年度笹川科学研究助成の公募

表紙紹介 ……14

第8回惑星地球フォトコンテスト:入選「太古からの流れ」

紹介 ……15

動く大地, 住まいのかたち:プレート境界を旅する 中谷礼仁(伊藤 孝)

CALENDAR ……16

学協会・研究会報告 ……17

「第10回白亜紀国際シンポジウム」(オーストリア・ウィーン)(安藤寿男)

TOPIC ……19

トリビア学史12 誤りは早く直しましょう(矢島道子)/日本地質図百景(石渡 明)

Island Arc日本語要旨 Vol.26, Issue 5 ……23

委員会だより ……26

125周年記念事業実行委員会:125周年記念事業について

支部コーナー ……27

関東支部:八丈島地熱巡検「再生可能エネルギーと地質学」のお知らせ/清澄フィールドキャンプ 実施報告

院生コーナー ……29

研究室紹介:九州大学地球進化史研究室(牧野帆乃香)

日本地方地質誌2. 東北地方 ほか:特別割引販売のお知らせ ……31

出版物在庫案内 ……32

### 事務局営業カレンダー

### お休み

9月 September

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

10月 October

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

印刷・製本:日本印刷株式会社 東京都豊島区東池袋4-41-24



# 一般社団法人日本地質学会 2018 年度代議員および役員選挙について

一般社団法人日本地質学会定款ならびに選挙規則・選挙細則に基づいて、代議員および役員（監事、理事）選挙を実施いたします。選挙規則類を掲載するとともに、選挙実施の要点について以下に記します。また、選挙規則等を掲載しましたのでご確認ください。

なお、会長（法人の代表）並びに副会長は、法人法に基づき代議員（社員）の中から選出された理事によって構成される理事会において、理事の中から選出します。ただし、理事会からの委託により、当選挙管理委員会が正・副会長への立候補の意思のある方について、代議員選挙と併せて会員の意向調査を実施いたします。このことについては、理事会からの案内（別記：代議員選挙にかかわる、正・副会長候補者の意向調査について）をご覧ください。

1. 今回、選挙管理委員会が実施する選挙は、正会員の直接選挙による代議員の選出と、その代議員の互選による理事の選挙です。
2. 代議員選挙の選挙人および被選挙人は、一般社団法人日本地質学会の正会員（全個人会員）に限ります。正会員は、1人1個の選挙権があります。
3. 代議員及び理事の選挙は2年ごとに実施し、全代議員（社員）および役員（理事）を選出（改選）します。なお、監事の選挙は4年ごとの実施で、今回がその年にあたります。
4. 代議員および理事の任期は2年、今回選出される方は、2018年度総会で選任され、2020年度の総会までが任期となります。
5. 代議員の選挙においては、全国区と地方支部区があります。地方支部区については、各自の所属している支部区についてのみ、立候補ならびに投票の権利があります。全国区・地方支部区とも立候補者数が定員を超えない場合は、無投票当選といたします。
6. 地方支部区選出理事の選出方法は、地方支部区ごとに当該支部区選出代議員により支部代表理事を1名選出する選挙を行います。詳細は、選挙実施要領4項2）および選挙規則第5条3項ならびに選挙細則13条をご参照ください。

その他、選挙の概要については以下の実施要領をご覧ください。また、投票に関する事務的なことや投票の仕方などにつきましては、投票用紙発送の際にお知らせいたします。

2017年9月10日

一般社団法人日本地質学会選挙管理委員会

委員長 佐藤智之

委 員 上田正人・柿崎喜宏・上栗伸一・佐藤峰南

## 2018 年度代議員および役員選挙実施要領

1. 代議員選挙日程（選挙人、被選挙人とも正会員）
  - 1) 立候補受付期間 10月13日（金）～11月6日（月）  
\*最終日18時必着
  - 2) 選挙広報・投票用紙の発送 11月25日頃までに届くよう郵送します。
  - 3) 選挙活動期間 11月27日（月）～12月17日（日）
  - 4) 投票期間 11月27日（月）～1月8日（月）  
\*最終日消印有効
  - 5) 開票日時 1月 11日（木）10時より  
学会事務所にて立会人のもと、選挙管理委員会が行う。
  - 6) 選挙結果報告 開票事務処理後、速やかにホームページ、メルマガ、News誌に掲載する。
2. 理事の選挙日程（選挙人、被選挙人とも代議員）
  - 1) 立候補受付期間 1月20日（土）～2月5日（月）  
\*最終日18時必着
  - 2) 選挙広報・投票用紙の発送 2月15日（木）頃までに届くよう郵送します。
  - 3) 選挙活動期間 2月16日（金）～2月22日（木）

- 4) 投票期間 2月16日（金）～3月4日（日）  
\*最終日消印有効
- 5) 開票日時 3月8日（木）15時より 予定
- 6) 選挙結果報告 開票事務処理後、速やかにホームページ、メルマガ、News誌に掲載する。
3. 代議員の立候補
  - 1) 代議員の定数は全国区100名・地方支部区100名、総数200名です。地方支部区は得票順、全国区は得票順および所定の階層別定員充足数を考慮して選出します。
  - 2) 各地方支部区の定数は、2017年8月10日の支部会員数により100名を比例配分しました。（ ）の中の数が各支部の定数です。  
北海道地方区 （5）名（北海道）  
東北地方区 （8）名（青森、秋田、岩手、山形、宮城、福島）  
関東地方区 （42）名（茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川）  
中部地方区 （17）名（新潟、長野、山梨、静岡、富山、石川、福井、岐阜、愛知）  
近畿地方区 （10）名（滋賀、奈良、京都、三重、大阪、

和歌山、兵庫)

四国地方区 (4) 名 (徳島、香川、高知、愛媛)

西日本地方区 (14) 名 (岡山、広島、鳥取、島根、山口、福岡、佐賀、熊本、長崎、大分、宮崎、鹿児島、沖縄)

- 3) 代議員地方支部区へ立候補する方は、登録住所の県別により該当する地方支部区に立候補してください。全国区は制限がありませんので、どの地域からでも出ることができます。

#### 4. 理事の立候補

- 1) 理事の定員は 50 名です。理事の選挙人および被選挙人は、当該選挙で選出された代議員です。

- 2) 地方支部区代表理事：7 名

50 名のうち 7 名は、地方支部区代表理事とします。選挙人および被選挙人は当該地方支部区選出の代議員とし、支部区ごとに選挙を行って、各支部 1 名ずつの支部代表理事を選出します。

- 3) 全国区選出理事：43 名

被選挙人は全国区選出の代議員とし、選挙人は全国区および地方区選出の全代議員による選挙を行い、得票順および所定の階層別定員充足数を考慮して選出します。

#### 5. 立候補の届出について

- 1) 立候補締切日は以下のとおり、いずれも 18 時必着とします。

代議員 2017 年 11 月 6 日 (月)

理 事 2018 年 2 月 5 日 (月)

- 2) 立候補届の書式

代議員、理事いずれも立候補届は所定の書式 (別途掲載) により、選挙管理委員会に郵送または E-mail で送付して

ください (持参不可)。書式は、Web サイトからダウンロードすることもできます。 (<http://www.geosociety.jp/>)

立候補は自薦および他薦のいずれも可とします。他薦の場合は、「候補者推薦承諾書」を添付してください。

< 郵送の宛名 >

〒 101-0032 東京都千代田区岩本町 2-8-15 井桁ビル

一般社団法人日本地質学会選挙管理委員会

< E-mail > 選挙管理委員会 [main@geosociety.jp](mailto:main@geosociety.jp)

件名：選挙立候補届

- 3) 立候補届受領書の発行

立候補届を受け取りましたら E-mail または郵便はがきにより、立候補者に受領書を発行します。

- 4) 正・副会長への立候補意思表示、マニフェストの提出  
代議員立候補者で、代議員、理事と選出されたのち、正・副会長に立候補する意思のある方は、会員による意向調査の資料として、代議員立候補届に加えて、完全版下用マニフェストを作成し添付してください。

#### < マニフェストの作成について >

A 4 判 1 ページ (タテ形) とし、内容の構成は自由です。配布用はモノクロ印刷のみ、Web サイトにはカラーでの掲載もできます。版下はモノクロとカラーの両方の提出が可能です。ただし、モノクロとカラーの違いによる表現の変化・変更は許容の範囲としますが、文言等の表記内容はモノクロ版、カラー版とも同一とし、変更は認めません。また、学会の公式ロゴおよび出版物等は、マニフェストに使用しないでください。

以上

### 会員各位

## 代議員選挙にかかわる、正・副会長候補者の意向調査について

一般社団法人日本地質学会理事会

一般社団法人日本地質学会の 2018 年度代議員ならびに役員選挙について、選挙管理委員会による告示が本号に掲載されました。会員各位におかれましては、地質学会の運営に対し十分に関心をお持ちいただき、積極的にご参加とご協力をいただきますようお願い申し上げます。

さて、法人の代表理事は、理事会において理事の中から選出するということが、法律によって定められ、本学会におきましても定款上はそうに定めております。

しかしながら、これまでの長い歴史と法人化を検討する中で会員の意向を踏まえ、会長および会長の補佐役である副会長の選出においては、会員の意向を諮ることができるよう、代議員選挙に付随することとして、選挙規則に盛り込みました。会員の意向が直接、選出につながるものではありませんが、理事会として正副会長を選

出する際の、重要な参考とさせていただくことといたしました。具体的には、定時に実施される選挙におきまして、全国区代議員 (および理事) の立候補者の中で、正・副会長への立候補の意思を示した方には、会員に向けてのマニフェストを公表していただき、それによって候補者に対する会員の意向を調査するというものです。

なお、この意向調査については、選挙管理委員会が管理する代議員選挙とは手続きを異にするものではありませんが、学会の代表者の選出にかかわって、全会員の意向を伺うということの性質上、その公正さを確保するためにも、選挙管理委員会の下で「意向調査」として実施いたします。つきましては、本号掲載の「選挙告示」にありますように、本意向調査を代議員選挙と同時に実施いたしますので、なにとぞよろしくご理解とご協力のほど、お願い申し上げます。

## 一般社団法人日本地質学会選挙の種別

### I. 選挙管理委員会によって行われる選挙

選挙	任期	選出方法	定員	選挙人	被選挙人	階層指定の定員数	候補者が定員どおりか定員未満のとき
1 代議員選挙 地方区	2年	投票	100	正会員	正会員	なし	投票なし
代議員選挙 全国区	2年	投票	100	正会員	正会員	大学(付属博物館) 小中高(教育センター) 官公庁(独法・博物館) 会社(財・社法人) 院生(研究生) 上記指定以外で得票順	12 投票なし 12 12 12 4 48
*【正・副会長候補者の意向投票】 予め立候補の意思表示をし、マニフェストを提出した代議員候補者							
2 理事選挙	2年	投票	7	地方支部区当選代議員	地方支部区当選代議員	なし、各地方支部区より1名	7 投票なし
定員合計 50名		投票	43	当選全代議員	全国区選出代議員	大学(付属博物館)	6 投票なし
					(正・副会長候補意向表明者も含まれる*)	小中高(教育センター)	6
						官公庁(独法・博物館)	6
						会社(財・社法人)	6
						院生(研究生)	2
3 監事選挙*	4年	投票	1	代議員	正会員	得票順	17
定員合計 2名	4年	指定	1	理事会の指名推薦	正会員	なし	投票なし
					非会員	なし	12月理事会で推薦候補者決定、選挙に届出

### II. 理事の互選によって行われる選挙

1 会長選挙	2年	承認又は投票	1	当選理事全員	意思表明した理事	なし	代議員、理事選挙の意向投票を尊重
副会長選挙	2年		2				
2 執行理事選挙	2年	投票	15	当選理事全員	会長・副会長選出者以外の理事	なし	投票なし
3 理事会正・副議長	1年	投票	2	当選理事全員	上記選出者以外の理事	なし	投票なし

# 2018年度代議員・役員選挙スケジュール

2017/9月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日
News9月号(9月末)、geo-flash(9/19)																															
10月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火
代議員立候補届け期間																															
11月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金
代議員立候補届け期間																															
12月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日
選挙活動期間																															
2018/1月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水
代議員選挙投票期間																															
2018/2月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
理事立候補届け期間																															
2018/3月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
理事選挙投票期間																															

◎E-mail送付可、郵送の場合はA4判(タテ)の大きさでご提出下さい。記入枠は適宜広げてください。

## 一般社団法人日本地質学会 代議員立候補届け

※ 全項目を必ず記入してください。

提出日 年 月 日

立候補者氏名				E-mail Address
立候補の区分	全 国 区		地方支部区	* 全国区、地方支部区のどちらか一方を選び、左欄に○を記入して下さい。
所属支部区:支部名	支部名:			* 地方支部区の方は、自分の所属支部を左欄に記入して下さい。 (北海道 東北 関東 中部 近畿 四国 西日本)
自薦・他薦の別	自 薦		他 薦	* 自薦、他薦いずれか一方の左欄に○を記入して下さい。
他薦:推薦者氏名	* 他薦の場合のみ、推薦者氏名を記入して下さい。			
立候補者所属機関	* 所属先がない場合は「なし」としてください。			
立候補者所属階層	階層名:			* 該当する所属階層を左欄に記入して下さい。 (大学 小中高 官公庁等 会社 大学院生 その他)
立候補の抱負または推薦文(120文字以内) * 推薦文の場合は推薦人名を文章の最後につけてください。それも含め全文字数120字以内で書いて下さい。				

## 会長・副会長への立候補意思表示

※全国区代議員立候補者のうち、正・副会長に立候補する意思のある方は、下記に記入して、マニフェストを添付してください。マニフェストは、モノクロ版およびカラー版のいずれか、または両方を添付することができます。

立候補の意思	会 長		副会長	* 立候補意思のあるどちらか一方の左欄に○を記入して下さい。
添付マニフェスト	モノクロ版		カラー版	* 添付するものの左欄に○を記入して下さい。

選挙管理委員会 受付日 年 月 日

※他薦で立候補される方は推薦承諾書に自署・捺印してください。E-mail の場合はPDFでご提出下さい。この部分のみ別紙でも可。

## 候 補 者 推 薦 承 諾 書

私は、一般社団法人日本地質学会の代議員候補者となることを承諾いたします。

氏名(自署)

印

選挙管理委員会 受付日 年 月 日



## 一般社団法人日本地質学会選挙規則

(目的)

第1条 一般社団法人日本地質学会定款（以下定款という）第14条にもとづいて本規則を定める。

(規則の変更)

第2条 この規則の変更は、理事会の議決によって行い、総会に報告し承認を求める。

(選挙の実施)

第3条 代議員ならびに役員の選出作業は、別途定める一般社団法人日本地質学会選挙細則（以下選挙細則という）に則り、選挙管理委員会が行う。

(代議員選挙)

第4条 代議員選挙は正会員による無記名投票とし、2年ごとに全定数を改選する。

2 代議員の選挙定員は、地方支部区100名、全国区100名からなるものとする。

3 各地方支部区の定員は、選挙告示1ヶ月前の各支部の正会員数に応じて比例配分する。定員確定後に会員の移動等のため届出所属が変わった場合でも、次期選挙までの地方支部区の定員割り当て数は変更しない。また、そのことにより実質減数となる地方支部区の定員補充は行わない。

4 代議員候補者は正会員とし、自薦および本人の承諾書を付帯する他薦とする。立候補者は別途定める選挙細則に則り、参考事項を記した立候補届けを所定の期日までに選挙管理委員会に届けなければならない。立候補届の提出にあたり、選挙管理委員会は全国区代議員候補者の中で会長・副会長立候補の意図のある正会員の意思表示を、別途定める方法により受け、代議員選挙活動期間開始前に全会員に開示することとする。

5 全国区選出代議員の選出にあたっては、付表の所属別定員充足数を満たすこととする。

6 選挙管理委員会は、選挙細則に則り、結果を開示するとともに総会に報告しなければならない。

7 選挙管理委員会の報告を受けた総会において代議員選挙結果は確定する。

8 当選後に地方支部区選出代議員の移動や所属別定員充足数票の組織の変更等により、届け出所属が変わった場合には、当該代議員の選出地方支部区が変更される。

9 代議員が任期中に何らかの理由で欠員となった際には、地方支部区選出代議員の補充に際しては次点者、全国区選出代議員の補充に際しては付表の所属別定員充足数を満たす次点得票者を繰り上げる。次点者が存在しない場合には欠員とする。

(役員選挙)

第5条 役員選挙は理事および監事を選出するものとし、代議員による無記名投票により、理事は2年ごと、監事は4年ごとに全定数を改選する。

2 理事の選挙定員は50名、監事は2名とする。

3 理事50名の選出は、各地方支部区代議員の中からそれぞれ1名を支部区代表理事として選出し、それらを除く数を全国区代議員から選出する。

4 地方支部区選出数を除き、定員にいたる残りの当選理事決定の際は、付表の所属別定員充足数を優先する。

5 理事立候補者は別途定める選挙細則に則り、参考事項を記した立候補届けを所定の期日までに選挙管理委員会に届けなければならない。

6 監事候補者は、理事会が推薦する者と会員からの立候補者を対象とし、理事会および候補者は別途定める参考事項を記した候補者届けを、所定の期日までに選挙管理委員会に届けなければならない。

7 選挙管理委員会は、選挙細則に従って、結果を開示するとともに総会に報告しなければならない。

8 選挙管理委員会は、当選者とともに順位を付けた補欠者を決定し、総会に報告する。

9 当選後に地方支部区選出理事の移動や所属別定員充足数票の組織の変更等により、届け出所属が変わった場合には、当該理事の選出地方支部区が変更される。

10 理事が任期中に何らかの理由で欠員となった際には、地方支部区選出理事の補充に際しては次点者、全国区選出理事の補充に際しては付表の所属別定員充足数を満たす次点得票者を繰り上げる。次点者が存在しない場合には欠員とする。

11 監事のいずれかが任期中に何らかの理由で欠員となった際には、選挙による次点者を繰り上げ、次点者が存在しない場合には理事会が後任を推薦し、総会での承認を得る。

(無投票選挙の指定)

第6条 代議員および役員選挙において、立候補者数が定数を超えない場合には、無投票当選とする。

(得票数同数の取り扱い)

第7条 代議員および役員選挙において、得票数が同数で順位をつける必要がある場合は、くじ引きにより順位を決める。くじ引きの方法は、当該の選挙管理委員会が定めるものとする。

(選挙実施細目)

第8条 定款ならびに本規則に定められたもの以外の、選挙の実施手続き等については、別途定める選挙細則及び選挙管理委員会規則によるものとする。

附則

(発足時の代議員)

2010年度選挙が実施されるまでの代議員には、任意団体日本地質学会の2008年度代議員が当たるものとする。

(発効)

- ・本規則は、2009年5月17日から施行する
- ・2013年5月18日 一部改正
- ・2014年5月24日 一部改正
- ・2017年5月20日 一部改正

付表

所属	備考	最低充足数全国区	
		代議員	理事
大学	大学付属博物館を含む	12	6
小中高	教育センター等を含む	12	6
官公庁等	行政法人、博物館等を含む	12	6
会社	社団、財団、NPO法人等を含む	12	6
大学院生	研究生を含む	4	2

## 一般社団法人日本地質学会選挙細則

(目的)

第1条 一般社団法人日本地質学会選挙規則(以下選挙規則という)第3条に則り、代議員ならびに役員選挙の実施手続きを本細則に定める。

(規則の変更)

第2条 この細則の変更は理事会において行い、総会に報告する。

(選挙管理委員会)

第3条 代議員ならびに役員の選挙は、定款、選挙規則、本細則に基づき選挙管理委員会が行う。

2. 選挙管理委員会は、選挙実施概要告示の2カ月以上前までに設置されなければならない。

3. 選挙管理委員会は、別途定める選挙管理委員会規則に基づいて運営されるものとする。

(開票立会人および立ち会い)

第4条 代議員および役員選挙においては、開票立会人2名を置く。開票立会人は、任期中の役員および代議員、被選挙人を除いた正会員の中から、執行理事会が選出する。

2. 開票立会人は選挙管理委員会の行う開票作業に、終始1名以上が立会わなければならない。開票立会人は当選者の決定を確認し、選挙管理委員会が作成する総会報告書に記名・捺印するものとする。

3. 開票立会人は、開票作業を行ってはならない。開票ならびに票の効力判定を注意深く見守り、疑義が生じたときはただちに選挙管理委員長に申し出て、疑義の解消をはかる。

4. あらかじめ選挙管理委員会の許可を得た正会員は、開票に立ち会うことができるものとするが、開票作業を行ってはならない。疑義が生じたときはただちに開票立会人に申し出る。

(代議員選挙の告示)

第5条 選挙の実施概要は、立候補受け付け開始の1か月以上前に、日本地質学会 News 誌ならびに WEB サイト等を通じて、会員に告示しなければならない。また、必要に応じて予備的告示を行うものとする。

2. 選挙管理委員会は告示に先立ち、当該年度の代議員および役員の選挙に関し、選挙スケジュール、その他必要事項の確認と決定を行い、当該選挙の実施概要として執行理事会に提示し、承認を受ける。

(代議員の立候補届および受理)

第6条 代議員に立候補する正会員は、所定の参考事項を記した立候補届を期日までに選挙管理委員会に提出しなければならない。

2. 立候補届等は所定の書式を用い、郵送または電磁的方法のいずれかによるものとする。

3. 立候補届には1) 全国区・地方区の別、2) 自薦・他薦の別、3) 立候補者氏名、4) 所属先、5) 所属階層、6) 他薦の場合は推薦者氏名、7) 立候補の抱負または推薦文、の参考事項を記すものとする。

4. 他薦による立候補者の場合は、本人の承諾書を添付するものとする。

5. 全国区の代議員立候補者のうち、会長・副会長の立候補の意図があるものは3項に加えてその意思表示を記すものとする。また、参考書類として所定の書式によるマニフェ

ストを添付しなければならない。

6. 立候補届の受付期限内であれば書類の差し替え、修正は随時できるものとする。

第7条 選挙管理委員会は立候補届の内容および添付書類を確認し、立候補者本人に受理書を発行する。届け出内容等に明らかな不備が認められる場合には、随時その確認と修正を求めることができるものとする。

(代議員立候補者名簿・参考書類の開示)

第8条 選挙管理委員会は速やかに立候補者名簿を作成し、投票の有無を確定する。

2. 立候補者名簿および参考書類は投票用紙とともに正会員に送付し、WEB サイト、News 誌においても開示するものとする。

(代議員選挙の投票)

第9条 投票権は、正会員1名につき1個とし、投票は所定の投票用紙と封筒を用い定められた期間内に、郵送により行うものとする。

(選挙活動)

第10条 代議員立候補者ならびに選挙管理委員以外の正会員は、定められた期間内に限り選挙活動を行うことができる。選挙活動は公正、適切な範囲で行い、倫理綱領に照らし節度あるものでなければならない。

2. 行き過ぎた選挙活動や選挙活動によるトラブルがあったと認められる場合、または会員からの訴えがあった場合は、選挙管理委員会が真偽の確認および調査を行い、理事会に報告して解決を図る。

(代議員選挙の開票および結果の開示)

第11条 選挙管理委員会は投票期間終了後、開票立会人の立ち会いのもとで速やかに開票を行い、選挙規則に則って当選者の決定を行うものとする。

2. 開票結果を総会報告書として作成し、立候補者にも通知する。WEB サイト、News 誌においても速やかに開示するものとする。

(役員選挙の告示と開示)

第12条 選挙管理委員会は、代議員選挙の結果に基づく理事と監事の選挙の実施概要を、当選した全代議員に告示し、WEB サイトにおいても開示するものとする。

(理事の立候補届)

第13条 理事選挙は、地方支部区選出理事の場合、被選挙人は当該支部区選出代議員の立候補者とし、選挙人は当該支部区選出の代議員とする。全国区理事の被選挙人は全国区選出代議員の立候補者とし、選挙人は、地方支部区ならびに全国区選出の全代議員とする。

2. 立候補届は所定の書式を用い、1) 自薦・他薦の別、2) 立候補者氏名、3) 所属先、4) 他薦の場合は推薦者氏名、5) 立候補の抱負または推薦文を記し、電磁的方法により期日までに選挙管理委員会に提出しなければならない。

3. 他薦による立候補者の場合は、本人の承諾書を添付するものとする。

(監事の立候補届)

第14条 監事の選挙は、選挙規則第5条第6項に従い、当選代議員以外の正会員から1名、理事会推薦者(会員外)から1名を選出するものとする。



## 一般社団法人日本地質学会 選挙管理委員会規則

### (目的・業務)

第1条 選挙管理委員会は、一般社団法人日本地質学会定款14条および第32条に定められた代議員ならび役員を選出するため、事務手続きの一切を選挙規則および選挙細則に基づいて公明正大に執り行う。

第2条 選挙管理委員会は、代議員および役員選挙の結果をWebサイトならびにNews誌で開示するとともに、総会に報告する。

### (委員会の構成)

第3条 選挙管理委員は会長、副会長、理事、監事および代議員を除く正会員のなかから理事会が選出し、会長が委嘱する5名の委員により構成される。

2 委員長ならびに委員長代理は委員の互選によって選出され、委員長は選挙管理委員会を代表する。

### (委員の任期)

第4条 委員の任期は総会への報告完了の日までとし、再任はさまたげない。

2 選挙管理委員は任期中、投票を除いて、代議員および役員選挙への立候補および立候補者の推薦、選挙活動をおこなうことができない。

### (選管補助要員)

第5条 選挙管理委員長は、事務局職員を選挙管理委員会の補助要員に任命し、業務の一部を委嘱することができる。委嘱期間は、9月10日～3月15日とする。

2 補助要員は委員長の指示により、選挙業務(立候補受付、立候補者確認・案内、WebサイトやNews誌への掲示作業、投票用紙・広報等の印刷、郵送、投票の受取など)に関して、選挙管理委員会をサポートし、円滑に選挙が遂行されるよう協力する。なお、選挙活動に類する行為は厳に慎むものとする。

### (附 則)

本規則は2009年6月30日から施行する。

以上

2. 立候補届は所定の書式を用い、1) 自薦・他薦の別、2) 立候補者氏名、3) 所属先、4) 推薦者氏名、6) 立候補の抱負または推薦文を記し、電磁的方法により期日までに選挙管理委員会に提出しなければならない。

3. 理事会推薦候補者および他薦の場合は、本人の承諾書を添付するものとする。

### (役員選挙立候補届の受理と立候補者名簿の開示)

第15条 選挙管理委員会は立候補届の内容を確認し、立候補者本人に受理書を発行する。届け出内容に明らかな不備が認められる場合には、随時その確認と修正を求めることができるものとする。

第16条 選挙管理委員会は立候補受け付け終了後、速やかに立候補者名簿を作成し投票用紙とともに、当選した全代議員に送付する。立候補者名簿はWebサイト、News誌においても開示するものとする。

### (役員選挙の投票および選挙活動)

第17条 投票権は、代議員1名につき1個とし、投票は所定の投票用紙と封筒を用い、定められた期間内に郵送により行うものとする。

第18条 役員立候補者、代議員ならびに選挙管理委員以外の代議員および正会員は、定められた期間内に限り選挙活動を行うことができる。選挙活動は公正、適切な範囲で行い、倫理綱領に照らし節度あるものでなければならない。

2. 行き過ぎた選挙活動や選挙活動によるトラブルがあったと認められる場合、または会員からの訴えがあった場合は、選挙管理委員会が真偽の確認および調査を行い、理事会に報告して解決を図る。

### (役員選挙の開票および結果の開示)

第19条 選挙管理委員会は投票期間終了後、開票立会人の立ち会いのもとで速やかに開票を行い、選挙規則に則って当選者の決定を行うものとする。

2. 開票結果を総会報告書として作成し、立候補者にも通知する。Webサイト、News誌においても速やかに開示するものとする。

### (選挙に対する異議申し立て)

第20条 代議員および役員選挙の結果に対する、会員からの異議申し立ては、選挙管理委員会に対して行う。

2. 選挙管理委員会は異議申し立て内容を確認、調査し、申立人との間で解決を図る。申立人が納得しない場合は、当該案件を総会の報告事項に加え、総会の決議に従うものとする。

### (選挙結果の承認)

第21条 選挙管理委員会は、選挙結果を総会に報告し、代議員および役員選任の承認を受けなければならない。

### (代議員および役員の欠員)

第22条 何らかの理由により、代議員および役員の任期中に欠員が生じた場合でも、選挙規則第5条第9号、10号、11号に基づき補充選挙は行わないものとする。

### (附則)

本細則は2009年6月30日から施行する。

2012年12月1日 一部改正。

2014年4月5日 一部改正

## 2018 年度一般社団法人日本地質学会各賞候補者募集について

日本地質学会では今年も運営規則第 16 条および各賞選考規則（本号別途掲載）にしたがい、下記の賞の候補者を募集いたします。ご応募いただいた方の中から、各賞選考委員会（委員は理事会の互選と職責により選出）が候補者を選考し、理事会での決定、総会での承認を経て表彰を行います。

論文賞・研究奨励賞の対象論文リストについては、地質学会のホームページ（<http://www.geosociety.jp/>）をご覧ください。また、学会事務局までお問い合わせください。

下記の応募要項をご参照の上、各賞選考委員会（学会事務局）あてにご応募下さい。期日厳守にて、たくさんのご応募をお待ちしております。なお、ご応募いただいた場合には、必ず受け取りのお返事をお出ししますのでご確認ください。

**応募の締め切りは各賞とも、2017 年 11 月 30 日（木）必着です。**

**所定の様式による、とあるものは事務局にご請求下さい。**

送付先：

郵送、e-mail 送信いずれも可、なるべく電子ファイルでの提出をお願いします。

ご応募いただいた場合には、必ず受け取りのお返事をお出ししますのでご確認ください。

〒 101-0032 東京都千代田区岩本町 2-8-15 井桁ビル 6 F 一般社団法人日本地質学会各賞選考委員会  
TEL：03-5823-1150, e-mail：main@geosociety.jp

### 1. 日本地質学会賞

授賞対象：地質学に関する優秀な業績をおさめた本会正会員もしくは名誉会員、またはこれらの会員を代表とするグループ。

応募方法：正会員、名誉会員、支部、および専門部会による推薦（自薦も可）。所定の様式による。

### 2. 日本地質学会国際賞

授賞対象：地質学に関する画期的な貢献があり、加えて日本列島周辺域の研究や日本の地質研究者との共同研究などを通じた日本の地質学の発展に関する顕著な功績があった正会員および非会員。

応募方法：正会員、名誉会員、支部、および専門部会が推薦。所定の様式による。

### 3. 日本地質学会小澤儀明賞・柵山雅則賞

授賞対象：地質学に関して優れた業績を上げた、2017 年 9 月末日で満 37 歳以下の正会員（研究テーマによって小澤儀明賞・柵山雅則賞のいずれかを授与）。

応募方法：正会員、名誉会員、および専門部会による推薦（自薦も可）。所定の様式による。

### 4. 日本地質学会研究奨励賞

授賞対象：2015 年 10 月から 2017 年 9 月までの過去 2 年間に「地質学雑誌」および「Island Arc」に優れた論文を発表した著者。2017 年 9 月末日で満 35 才未満の正会員、筆頭著者であれば共著でもよい。

応募方法：推薦理由書添付（400 字程度）。正会員・名誉会員および専門部会であればどなたでも推薦ができます。

### 5. 日本地質学会論文賞

授賞対象：

1) 2014 年 10 月から 2017 年 9 月までの過去 3 年間に「地質学雑誌」に発表された優れた論文。

2) 2014 年 4 号から 2017 年 5 号（9 月）までの過去 3 年間に「Island Arc」に発表された筆頭著者が本会会員による優れた論文。

応募方法：推薦理由書添付（400 字程度）。正会員・名誉会員および専門部会であればどなたでも推薦ができます。

### 6. 日本地質学会小藤文次郎賞

授賞対象：2015 年 10 月から 2017 年 9 月までの間に重要な発見または独創的な発想を含む論文を発表した会員。

応募方法：推薦理由書（400 字程度）。正会員・名誉会員および専門部会であればどなたでも推薦ができます。地質学雑誌・Island Arc 誌以外で発表された論文は PDF によるコピーを添付して下さい。

### 7. 日本地質学会功労賞

授賞対象：長年にわたり地質学の発展に貢献のあった本会正会員もしくは非会員。またはこれらを代表するグループ。

応募方法：正会員・名誉会員、支部、または専門部会が推薦。所定の様式による。

### 8. 日本地質学会表彰

授賞対象：地質学の教育活動、普及・出版活動、新発見および露頭保全、あるいは新しい機器やシステム等の開発等を通して地質学界に貢献のあった個人、団体および法人。対象者は会員・非会員を問いません。

応募方法：正会員・名誉会員、支部、または専門部会が推薦。所定の様式による。

注) 日本地質学会賞・国際賞・研究奨励賞・小澤儀明賞・柵山雅則賞の受賞候補者は、過去においてそれぞれの賞を受けていないことが要件となります。

2017 年 9 月

一般社団法人日本地質学会各賞選考委員会

委員長 星 博幸

委員 天野一男・笠間友博・亀尾浩司・清川昌一  
澤口 隆・田村嘉之・竹下 徹・狩野彰宏  
山路 敦・岩森 光・大藤 茂・秋元和実  
小嶋 智・伊藤 慎・海野 進・武藤鉄司  
田村芳彦・保柳康一



## (関連資料)

### 一般社団法人日本地質学会各賞選考規則

#### (目的)

1. 本規則は、一般社団法人日本地質学会（以下地質学会という）運営規則第16条3項に基づき地質学会の各賞選考に関する手続きを定める。

#### (選考)

2. 各賞の選考は、理事会のもとにおかれる各賞選考委員会が行う。各賞選考委員会については別途定める。

#### (各賞の受賞対象および応募資格等)

3. 日本地質学会賞の応募に関する細目は次のとおりとする。
  - 1) 応募資格：正会員、名誉会員、ならびに前記のものを代表とするグループ。ただし、過去において本賞を受けていない者。
  - 2) 応募方法：正会員、名誉会員、支部および専門部会による推薦、自薦も可とする。所定の様式による。
4. 日本地質学会国際賞の応募に関する細目は次のとおりとする。
  - 1) 応募資格：正会員および非会員。ただし、過去において本賞を受けていない者。
  - 2) 応募方法：正会員、名誉会員、支部および専門部会による推薦。所定の様式による。
  - 3) 国際賞の授与は毎年度1名以内とする。
5. 日本地質学会 Island Arc 賞の受賞対象は次のとおりとする。
  - 1) 募集開始年の3年前と2年前に Island Arc 誌に発表された論文。
6. 日本地質学会小澤儀明賞・柵山雅則賞の応募に関する細目は次のとおりとする。
  - 1) 応募資格：募集開始年の9月末日で満37歳以下の正会員。ただし、過去において本賞を受けていない者。
  - 2) 応募方法：正会員、名誉会員および専門部会による推薦。自薦も可とする。所定の様式による。
  - 3) 賞の名称は、受賞する研究のテーマによって各賞選考委員会が定める。
7. 日本地質学会論文賞の受賞対象は次のとおりとする。
  - 1) 募集開始年9月までの過去3年間に地質学雑誌に発表された論文。
  - 2) 募集開始年9月までの過去3年間に Island Arc に発表された、筆頭者が地質学会会員による論文。
  - 3) 応募方法：正会員および名誉会員、専門部会による推薦。400字程度の推薦文を添付すること。
8. 日本地質学会小藤文次郎賞の受賞対象は次のとおりとする。
  - 1) 募集開始年9月までの過去2年間に重要な発見または独創的な発想を含む論文。
  - 2) 応募方法：正会員および名誉会員、専門部会による推薦。400字程度の推薦文を添付すること。
9. 日本地質学会研究奨励賞の受賞対象および資格者は次のとおりとする。
  - 1) 募集開始年9月までの過去2年間に地質学雑誌および Island Arc に発表された論文の著者。ただし、過去において本賞を受けていない者。
  - 2) 募集開始年9月末日で満35才未満の会員。筆頭著者であれば共著でもよい。
  - 3) 応募方法：正会員および名誉会員、専門部会による

推薦。400字程度の推薦文を添付すること。

10. 日本地質学会優秀ポスター賞の受賞候補者の応募および選考に関する細目は次のとおりとする。
  - 1) 応募対象：各賞選考委員会が対象と定める講演会において発表されたポスター講演の発表者またはこれらを代表するグループ。
11. 日本地質学会功労賞の受賞候補者の応募に関する細目は次のとおりとする。
  - 1) 応募対象：地質学会正会員および非会員、またはこれらを代表するグループ。
  - 2) 応募方法：正会員、名誉会員、支部または専門部会による推薦、所定の様式による。
12. 日本地質学会表彰の応募に関する細目は次のとおりとする。
  - 1) 応募対象：会員および非会員の個人、団体または機関。
  - 2) 応募方法：正会員、名誉会員、支部または専門部会による推薦、所定の様式による。

#### (応募に関する告示)

13. 各賞の応募に関する告示は、応募締め切り期日の3カ月前までに News 誌、Web サイト等で行う。

#### (選考結果の記録と報告)

14. 各賞選考委員会は、選考過程と選考結果について文書で理事会に報告する。

#### (規則の変更)

15. 本規則の変更は理事会の議決による。

#### 附則

本規則は、2009年9月3日から施行する。  
2011年4月2日、一部改正。  
2012年4月7日、  
2013年5月18日、

### 一般社団法人日本地質学会各賞選考委員会規則

#### (目的)

1. 一般社団法人日本地質学会（以下地質学会という）各賞選考規則第2項に基づき、本規則を定める。

#### (委員の構成および選出)

2. 各賞選考委員会（以下選考委員会という）は、理事会が推薦する10名の委員と前・現地質学雑誌編集委員長および前・現副委員長、Island Arc 前・現編集委員長で構成する。
  - 1) 理事会推薦委員の10名は、専門を考慮して理事の互選により選出し、委員長はこの委員間の互選とする。
  - 2) 理事会推薦委員の任期は2年とする。

#### (選考検討委員会等の設置)

3. 選考委員会は、日本地質学会賞、日本地質学会国際賞、日本地質学会小澤儀明賞・柵山雅則賞ならびに日本地質学会 Island Arc 賞の選考に関しては、選考委員会のもとに随時、選考検討委員会を設置して諮問することができる。
4. 日本地質学会賞、日本地質学会国際賞ならびに日本地質学会小澤儀明賞・柵山雅則賞の選考を行う選考検討委

- 員会は、前・現地質学会長、過去3年間の日本地質学会賞受賞者、前・現地質学雑誌編集委員長、前・現 Island Arc 編集委員長および執行理事会が推薦する若干名の委員など10名程度で構成し、委員長は委員間の互選とする。
5. 日本地質学会 Island Arc 賞の選考検討委員会は、現 Island Arc 編集委員長と Editorial Advisory Board のメンバー若干名によって構成し、委員長は委員間の互選とする。
6. 選考委員会は、優秀ポスター賞の選考に関して、随時、優秀ポスター賞選考委員を任命し、その意見を選考の参考にすることができる。

(利益相反)

7. 選考委員会委員ならびに選考検討委員会委員が受賞候補対象者となった場合、または委員と候補者の関係が深い(親族、共同研究者、研究指導者など)と判断される場合は、地質学会利益相反防止規則に基づいて、該当する賞の選考には一切関与しないこととする。これによって減数した委員の補充は行わない。

附則

- (1) 本規則の変更は理事会の議決による。  
(2) 本規則は、2009年9月3日から施行する。  
(3) 2011年4月2日、一部改正。





## ご案内

本会以外の学会および研究会・委員会からのご案内を掲載します。

### 第15回男女共同参画学協会 連絡会シンポジウム

日時：2017年10月14日（土）10:00～17:00  
（17:15から懇親会）

場所：東京大学本郷キャンパス 医学部教育研究棟14F鉄門記念講堂  
（東京都文京区本郷7-3-1）  
[http://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/cam01\\_02\\_09\\_j.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/cam01_02_09_j.html)

主催：男女共同参画学協会連絡会

共催：東京大学

後援：内閣府 男女共同参画局、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、科学技術振興機構、日本学術会議、日本経済団体連合会、経済同友会、日本商工会議所、国立大学協会、日本私立大学連盟、国立女性教育会館

申込：シンポジウム参加（2000円/人）につきましては、当日参加も可能ですが、事前申込（〆切9/18）にご協力いただきますようお願い申し上げます。

申込書式は下記ホームページよりダウンロードいただけます。

ホームページ：<http://www.djrenrakukai.org/symposium1.html>

#### 《各種参加費》

- ・参加登録：参加費 2000円/人（資料集代を含む）※学生の聴講は無料（資料集配布なし）
- ・資料集送付：500円＋送料
- ・懇親会参加：参加費 5000円/人
- ・資料集掲載：掲載料 2000円/件
- ・ポスターセッション：登録料 5000円/件

問い合わせ先

第15期男女共同参画学協会連絡会事務局  
[symposium2017@djrenrakukai.org](mailto:symposium2017@djrenrakukai.org)

### 赤磐の地球史研究所 開設記念事業

地球史研究所は赤磐市の旧備作高校跡地活用事業として、NPO法人地球年代学ネットワーク（jGnet）が運営する地球惑星科学の国際的な教育・研究・普及活動の拠点施設です。地球史研究所ではそこで得られる研究成果を地域の住民と共有して、将来の吉井川流

域を対象としたジオパーク設立へ向けた基盤作りにも協力します。下記の通り本研究所の開設記念行事を開催予定です。

主催：NPO法人地球年代学ネットワーク  
共催：赤磐市、（一部について建設コンサルタンツ協会）

後援：日本地質学会ほか

#### オープニング・フェスタ

2017年10月14日（土）10:00～16:00

会場：

赤磐市吉井会館（赤磐市周匝136-1）

吉井支所駐車場（赤磐市周匝136）

地球史研究所（赤磐市周匝1599）

周匝地区周辺

科学体験コーナー（会場：吉井支所駐車場）

協力：蒜山地質年代学研究所、岡山理科大学、産業技術総合研究所等

・パネルと岩石試料の展示 ・模擬実験の観察と体験 ・化石探し体験

・ミニ巡検と施設見学（徒歩）等を予定

市民討論会（周匝に宝をさがす）（会場：吉井会館）

世話人：乙藤洋一郎（jGnet、神戸大学名誉教授）

ある場所に住み続けると、周りの自然・景観は、自分にとっては「ふつう」のものになっていきます。ところが、外から見るとその自然・景観は実は面白いものだったりします。「外からの視点から」周匝の自然・景観のなかで興味深いものと考えたものに対し、周匝に住む住民の方々にその価値を語ってもらおう。キーワードは、周匝の宝物を探せ！など

#### オープニング記念国際会議

2017年10月15日（日）10:00～20:30

会場：岡山国際交流センター（岡山市北区奉還町2丁目2-1）

S1：初期地球史研究セッション

S2：日本と韓国の古第三紀チャネル堆積物の対比：今後の展望

S3：地球科学の最前線から（討論会）

詳しくは、<http://jgnet.org/>

## 公募

教員・職員公募等の求人ニュース原稿につきましては、採用結果をお知らせいただけますようお願い致します。



### 東京工業大学理学院地球惑星 科学系教員の公募（助教）

1. 募集人員 地球惑星科学系専任助教（任期5年以内、再任1回3年以内）1名

専門分野：固体地球物理学

（1）データ解析、理論、数値シミュレーションなどにより、地球内部物理学に関する研究を推進できる方

（2）本系の他分野にも広く関心を持ち、他研究室との共同研究も積極的に取り組む方

（3）学院の教育研究を通して、次世代研究者育成に意欲的に取り組む方

2. 応募資格：博士学位を有する方、または着任までに博士学位取得見込みの方

3. 着任時期：2018年4月1日以降のできるだけ早い時期

4. 提出書類

次の（1）～（6）のデータを電子ファイル（PDFファイル）にして提出してください。

（1）履歴書（2）これまでの研究の実績（2000字程度）（3）今後の研究・教育の計画・抱負（2000字程度）（4）研究業績リスト（A）査読付き原著論文（英文による国際雑誌掲載のもの）（B）著書、特許、その他特記すべき出版物（5）主な原著論文の別刷（コピー可）3編以内（6）応募者について参考意見をうかがえる方の氏名・所属・e-mailアドレス（2名）※注：選考の過程で必要が生じた場合、追加して書類を提出していただくことがあります。

5. 応募締切：2017年10月13日（金）必着

6. 応募書類の送付先

提出データを、[application.assistant.professor\\_at\\_geo.titech.ac.jp](mailto:application.assistant.professor_at_geo.titech.ac.jp)宛の電子メールに添付書類（ファイルサイズ10MB以内）としてご送付ください（\_at\_ を@に変えて下さい）。提出データを受けとった際には受け取り確認のメールをお送りします。電子メール以外での提出を希望される場合はご相談ください。

7. 問い合わせ先 中島淳一 e-mail: [nakajima\\_at\\_geo.titech.ac.jp](mailto:nakajima_at_geo.titech.ac.jp)

東京工業大学理学院地球惑星科学系

<http://educ.titech.ac.jp/eps/>

信州大学理学部助教  
(特定雇用) 公募 (主担当:  
理学部理学科物質循環学コース  
地球システム解析分野)

職名・人員: 助教 (特定雇用)・1名

所属学部等: 信州大学理学部理学科物質循環学コース

雇用上の条件:

①給与: 年俸制 ②任期の定めあり (平成32年3月31日まで)。ただし、任期満了後、信州大学学術研究院理学系 (主担当: 理学部) において、任期を付さない教員として、引き続き採用する予定である。③勤務地: 信州大学理学部 (長野県松本市旭3-1-1)

募集分野:

- ・陸水、水文、雪氷、大気環境、元素循環などの講義のいずれかを担当できる方
- ・地球表層の水循環や元素循環に関する研究分野

職務: 上記分野における研究のほか、大学院総合医理工学研究科山岳環境科学分野 (博士課程)、大学院総合理工学研究科理学専攻理科学分野 物質循環学ユニット (修士課程) 及び学部 (理学科物質循環学コース) 関連の教育と研究指導を担当して頂きます。なお、松本キャンパスにおいて共通教育科目を担当して頂くこともあります。また、研究活動に支障のない範囲で管理運営業務にも従事して頂きます。

応募資格:

- ①地球システム解析分野の水循環や元素循環に関する研究の実績を有し、外部資金の獲得、社会活動、国際的活動に対しても意欲的に取り組んでいただける方を求めます。②博士の学位を取得されている方が望ましい。③ポストドク経験があることが望ましい。④平成29年度末で36歳未満の方。

成29年度末で36歳未満の方。

文部科学省国立大学改革強化推進補助金 (国立大学若手人材支援事業) のため、雇用対策法施行規則第1条の3第1項例外事由3号の二に該当し、本学として応募資格を設定しています。

採用予定日: 平成30年2月1日以降できるだけ早い時期

応募締切: 平成29年10月27日 (金) 必着  
問合せ先:

〒390-8621 松本市旭3-1-1

信州大学理学部物質循環学コース

コース長 朴 虎東

Tel & Fax: 0263-37-2490

E-mail: pparkhd@shinshu-u.ac.jp

待遇、応募書類等工房に関する詳細は、下記よりご覧ください。

<http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/science/recruit/>

各賞・  
研究助成



日本地質学会に寄せられた候補者の募集・推薦依頼等をご案内いたします。

2018年度笹川科学研究  
助成の公募

申請期間:

【学術研究部門】・【実践研究部門】

・ユーザ登録: 2017年9月4日開始

・申請期間: 2017年9月15日 (金) ~ 2017年10月16日 (月) 23:59

※実践研究部門の受付締切が早まり、学術研究部門と同じとなりました。

主な募集対象者:

【学術研究部門】

・大学院生 (修士課程・博士課程)

・35歳以下の若手研究者

【実践研究部門】

・博物館、NPOなどに所属している者

申請方法:

本年度から、Webでの申請となりました。詳細は本会Webサイトをご確認ください。

本会Webサイト

<http://www.jss.or.jp/ikusei/sasakawa/>

問い合わせ先

公益財団法人日本科学協会 笹川科学研究助成係

TEL 03-6229-5365 FAX 03-6229-5369

<http://www.jss.or.jp>

E-mail: josei@jss.or.jp

表紙紹介

第8回惑星地球フォトコンテスト: 入選  
「太古からの流れ」

写真: 木下 滋 (和歌山県)

【撮影場所】和歌山県西牟婁郡さみ町小附、城川 (日置川支流)

【撮影者より】和歌山県さみ町に「まだら岩」と呼ばれている地層があります。砂岩と泥岩が交互に重なった地層が、地価の熱水によって熱変性を受け硬化したものだそうです。太古からの水の流れが岩を削り取った模様もたいへん興味深く、自然の凄さを実感できます。

【審査委員長講評】評者は、このような溪谷があるのを初めて知りました。この作品にはスケールになるようなものが写っていないので、どのくらいの高さかわかりません。しかし、虎皮のようなパターンが強烈なので、大きさをわからせないのも作品を魅力的にする方法かもしれません。(委員長: 白尾元理)

【地質的背景】まだら岩は、紀伊半島南部を流れる日置川の支流城川にあります。日置川流域には始新世に堆積した四万十付加体の牟婁付加シークエンス (牟婁層群) が広く分布します。牟婁付加シークエンスは砂岩層、砂岩泥岩互層、泥岩層および礫岩層からなる海底扇状地を形成した堆積体です。城川は中期中新世の火成作用によって形成された、南北にのびる琴の滝変質帯を横切るように流れています。まだら岩はこの熱水変質をうけて、白色化・硬化した牟婁付加シークエンスの砂岩泥岩互層 (タービダイト) です。硬化したタービダイトが城川の瀬で磨かれて、砂岩の白、泥岩の黒に、酸化鉄の黄褐色が付加されたまだら岩が城川の清流に映えています。(南紀熊野ジオパーク学術専門委員: 中屋志津男)





## 紹介

### 動く大地、住まいのかたち： プレート境界を旅する

中谷礼仁



岩波書店 2017年3月24日発行 四六判  
268ページ、定価2,600円（税別）  
ISBN 978-4-00-022235-8

「ああ、こんな時代がやってきたのか」、「ついに、こんな人が現れたのだ」。

この本を読み進めつつ何度思ったことだろう。この本の著者、中谷礼仁氏は建築史、歴史工学、建築理論の専門家であるが、本書はその中谷氏が地質図を携え、意識的に世界中のユーラシアプレートの境界に赴き、それぞれの土地における建築のありようを調べ体感した、フィールド調査のエッセンスである。

2013年1月2日～9月9日の8ヶ月のあいだに、約1ヶ月から1ヶ月半にわたる旅を4度も敢行し、その行程は、インドネシア、インド、ネパール、イラン、そして、トルコ、ギリシア、マルタ、シチリア、チュニジア、モロッコと、ユーラシアプレートの南の境界を一気に駆け抜けたことになる。

この旅は、東日本大震災後に東北の海岸沿いを訪れた際、建築の土台となるべき大地が水中に没しているのを目の当たりにしたこと、その経験により、以前聴いた日本とアジアはプレート境界を通じて繋がっているという話を思い出したこと、また、地図を見返した際、古代文明圏が成立した箇所とユーラシアプレートの境界の関係性に気付いたこと、

などが発端になっているらしい。これらもろが、「プレート運動は、まさに創造と破壊の両面をかね備えていた。この両方に直面している各地域において、人間がどのように住まい、ひいてはどのような文明・文化を紡いできたのかを、大きくつかみたい」という想いとして結実したわけだ。

本書では、旅先で出会った人々、それらの人々が暮らす住まいについて、詳細に、しかもかなりの温かみをもって述べられている。「パンゲアのかげら」、「屋根となった溶岩」、「石は建築の父」、「土は建築の母」など、小見出しを少し拾うだけでも、地質が重く扱われていることが実感できるだろう。とくに、石灰岩と大理石にいたっては「適度な柔らかさは、人間に彫刻芸術というもう一つの飛躍をも、もたらした」と大絶賛されている。その本来海にあるべき石灰岩が陸に露出していることを、付加体モデルの図入りで解説する至れり尽くせり具合だ。また、氏の日本語はどこまでも美しく、時に詩的ですらある。純粋に読書する楽しみを思い起こさせてくれる。

訪れた場所は、すべて英文表記もなされ、かつ緯度・経度も記されているので、すぐにweb上の地図で飛ぶことができる（ただし、これを本気でやり出すと、ちっとも読み進められない状況となる）。また、本書には訪れた地点の様子を理解するのに補助となる写真・図等が掲載されているが、さらに氏個人ホームページでは旅の貴重な記録となる写真も惜しげもなく公開されている。

この旅の着想が、古代文明とユーラシアプレート境界との関係性についての気づきであるので、自然に、家、集落、国家、文明の関わり・階層性についても氏の筆は触れている。少し、引用してみる。

「人間の住まいの原則とは何か。端的に主張すると、それは大地から縁を切ることである。座ったとき、寝たときに大地の状態を直接体が受け止めないようにすることである。」

「人間は近場の大地から家を作る。つまり物質の水平、垂直の移動によって、ほんの少しだけ大地を動かし、その隙間に人の住みつく空間を作りあげる。これが家であり集落なのだ。」

「大地の素材を水平、垂直に移動し、人の住む空間を作り上げたのが集落だとすれば、それはいまだに大地の性質からの制限を強く被っていた。文明の誕生とはそのような段階から離れることである。」

「実際のところ集落は永続するが、国家は誕生と滅亡を繰り返した。」

一方、地質の側からみた建築のありよう、さらに地質の立場からみた文明論に関する考察は、少数精鋭の観はあるが、1980年代以降、連綿と継続されている（例えば、原田、1990；蟹澤、2010など）。本書の発刊は、建築の側からも橋が延ばされ、ついに、両者が有機的に繋がりがつつある、ということなのかかもしれない。

この旅は、中谷氏単独の場合もあるが、基本的には、中谷氏と専門や得意とするフィールドのやや異なる一人もしくは二三人の研究者の同行、さらに現地の協力者を得て行われている。この本を読み進めつつ、何度も妄想してしまったことは、この旅にフィールド地質学を専門とする地質屋が加わっていたら、どうなっていたのか、という点である。

近年、地質学会の全国大会において、ジオパーク関連の発表会場は活況を呈し、かつ文化地質学のセッションもレギュラー化され、地質と文化の距離は急速に縮まりつつある。中谷氏本人、もしくは中谷氏と同様の指向を持つ建築の専門家と地質学会や連合大会等の場で議論できることも遠い未来のことではないだろう。「あとがきに代えて」によれば、氏は、現在プレート境界には位置していない土地の地質と建築の旅を視野に入れているようである。それが地質学者との濃厚な関わり合いのもと実現されることを期待したい。

#### 文献

原田憲一、1990、地球について、国際書院、373p.

蟹澤聰史、2010、石と人間の歴史：地の恵みと文化、中公新書、257p.

（茨城大教育 伊藤 孝）

# CALENDAR

2017. 9 ~

地球科学分野に関する研究会、学会、国際会議、などの開催日、会合名、開催学会、開催場所をご案内致します。会員の皆様の情報をお待ちしています。

★印は学会主催、(共) 共催、(後) 後援、(協) 協賛。

## 2017年

### 9月 September

#### ○日本鉱物科学会2017年年会

9月12日(火)～14日(木)

会場：愛媛大学城北キャンパス(松山市文京)

<http://jams.la.coocan.jp/2017nenkai/2017nenkai.html>

#### (共) 2017年度日本地球化学会第64回年会

9月13日(水)～15日(金)

会場：東京工業大学・大岡山キャンパス

<http://www.geochem.jp/meeting/index.html>

#### ○第34回歴史地震研究会(つくば大会)

9月15日(金)～17日(日)

場所：つくばイノベーションプラザ

<http://sakuya.ed.shizuoka.ac.jp/rzisin/menu7.html>

#### ★日本地質学会第124年学術大会(2017愛媛大会)

9月16日(土)～18日(月)

場所：愛媛大学城北キャンパス(松山市文京)

#### (共) 海底火山研究国際シンポジウム

9月20日(水) 14:00～18:00

場所：国立科学博物館本館2階講堂

<http://www.kahaku.go.jp/news/2017/seamount/>

#### ○女子大学院生・ポスドクと産総研女性研究者との懇談会 in 名古屋

9月25日(月) 13:15～17:00

会場：産業技術総合研究所 中部センター OSL棟 連携会議場

参加費無料・事前申込制(定員60名)

[https://unit.aist.go.jp/diversity/ja/event/170925\\_div\\_event.html](https://unit.aist.go.jp/diversity/ja/event/170925_div_event.html)

#### (共) 第61回粘土科学討論会

9月25日(月)～27日(水)

会場：富山大学 五福キャンパス共通教育棟

<http://www.cssj2.org/>

#### ○第20回水環境学会シンポジウム

9月26日(火)～28日(木)

場所：和歌山大学

特別講演会「紀の川の水環境」

<http://www.jswe.or.jp/event/symposium/>

#### ○IGCP589「アジアにおけるテチス区の発達」第6回国際シンポジウム「Western Tethys meets Eastern Tethys」

9月29日(金)～30日(土)

ポスト巡検：10月1日(日)～5日(木)

場所：ポーランド、クラクフ市

<http://igcp589.cags.ac.cn/>

### 10月 October

#### (後) 第4回Slope tectonics 2017

10月14日(土)～18日(水)

場所：京都大学宇治キャンパス黄檗プラザ

<http://www.slope.dpri.kyoto-u.ac.jp/SlopeTectonics2017/st2017.html>

#### (後) 地球史研究所開設記念事業

10月14日(土)～15日(日)

主催：NPO法人地球年代学ネットワーク

14日(土) 10:00～16:00

オープニング・フェスタ

場所：赤磐市吉井会館(赤磐市周匝136-1)

および周辺施設

参加費：無料

15日(日) 10:00～20:30

会場：岡山国際交流センター(岡山市北区奉還町2丁目2-1)

記念国際会議

[http://jgnet.org/event20171014\\_1/](http://jgnet.org/event20171014_1/)

#### ○第15回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム

10月14日(土) 10:00～17:00

場所：東京大学本郷キャンパス

<http://www.djrenrakukai.org/symposium1.html>

#### ○テクノブリッジフェア2017 in つくば

10月19日(木)～20日(金) 9:30～17:00

場所：産業技術総合研究所つくばセンター

<http://technobridge.aist.go.jp>

#### (共) 第15回国際放散虫研究集会(15th InterRad)

10月23日(月)～27日(金)(研究集会)

20日(金)～22日(日)(プレ巡検)

22日(日)サイエンスカフェ

28日(土)～31日(火)(ポスト巡検)

場所：新潟大学など

<http://interrad2017.random-walk.org/>

#### ○IGCP608 Asia-Pacific Cretaceous Ecosystems第5回国際研究集会

10月26日(木)～27日(金)

場所：韓国済州島

<http://igcp608.sci.ibaraki.ac.jp/>

### 11月 November

#### ○第71回日本人類学会大会

11月3日(金)～5日(日)

会場：東京大学本郷キャンパス

<http://anthrop-meeting.sakura.ne.jp/>

#### ○16th Gondwana International Conference/ IAGR 2017 Annual Convention/ 14th International Conference on Gondwana to Asia

タイ・バンコク、11月12日(日)～17日(金)

プレ巡検：10日(金)～12日(日)、ミド巡検：15日(水)、ポスト巡検：18日(土)～20日(月)

<http://www.dmr.go.th>

#### ★関東支部：八丈島地熱巡検

11月24日(金)～25日(土)

募集人数：12～20人

費用：25,000円程度

申込期限：10月31日(先着順)

<http://kanto.geosociety.jp>

#### ○防災推進国民大会2017

11月26日(日)～27日(月)

会場：仙台国際センター(仙台市青葉区青葉山)

<http://bosai-kokutai.jp/>

### 12月 December

#### (協) 第33ゼオライト研究発表会

11月30日(木)～12月1日(金)

会場：長良川国際会議場

<https://jza-online.org/events>

#### ○地質学史懇話会

12月23日(土) 13:30～17:00

場所：北とびあ8階803号室(東京都北区王子)

・平田大二「日本の自然史系博物館を考える」

・藤岡換太郎「相模湾の散策：日本の三大深海湾の謎を探る」





## 学協会・研究会報告

### 「第10回白亜紀国際シンポジウム」 (オーストリア・ウィーン)

安藤寿男 (茨城大学理学部)

層序・古環境・古地理・古生物・堆積地質・構造地質などの、白亜紀の地質科学全般に関する最新の研究成果を、世界各国の研究者が持ち寄って行く、第10回白亜紀国際シンポジウム (10th International Symposium on the Cretaceous: 以下10th ISC) が、8月20～24日に、オーストラリア地質調査所、ウィーン自然史博物館の協力を得て、ウィーン大学で行われた。

白亜紀国際シンポジウムは、1978年にドイツ西部の小都市ミュンスターで開催されて以来、ドイツ圏を主とするヨーロッパを中心に、4年もしくは5年に1度開催されてきた。2009年の第8回はイギリスのプリマス大学 (Malcolm Hart教授)、第9回はトルコ・アンカラの中東工科大学 (Ismael Ömer Yilmaz教授) で行われた。ウィーンでは2000年に第6回を開催して以来2回目となる。

今回、ホストを務めたのは、IGCP609 “Climate-environmental Deteriorations during Greenhouse Phases: Causes and Consequences of Short-term Cretaceous Sea-level Changes (略称: Cretaceous sea-level changes) (2013–2017年)” のリーダーを務めるウィーン大学のMichael Wagreich教授である。IGCP609は、安藤がリーダーを務めるIGCP 608「白亜紀のアジア-西太平洋地域の生態系システムと環境変動」の姉妹プロジェクトでもある。10th ISCはIGCP609の第5回国際集会の意義も込めて行われており、IGCP609のセッションもほかのセッションと合同で4日目に行われた (以下に示すセッションリストのT4.C05+C08)。登録者が220名65カ国で、キャンセルも少なくなかったが、それでも200名を超える参加者があった。日本からは、安藤のほか松岡篤氏 (新潟大)、長谷川 卓氏 (金沢大) と、増川玄哉 (茨城大院博士前期) の4名が参加した。

会場は、オーストラリア皇帝ルドルフ4世 (1358-1365) が1365年に設立した、ドイツ語圏最古・最大の大学であるウィーン大学の、UZA IIと呼ばれる地球科学・地理・天文学部の地球科学棟と隣接する薬学部棟である。ウィーン市内各所にある歴史建造物の多い校舎の中でも、UZA (University Center Althanstraße) IIは、オーストリア連邦鉄道

(OBB) のFranz-Josefs駅北側の線路をまたいで作られた大きな校舎である。西隣の生命科学部とあわせて近代的な巨大な複合校舎をなしている (写真1)。

#### ウィーン自然史博物館で行われたIce Breaker

会議前日夜の歓迎パーティ (Ice Breaker) はウィーン自然史博物館の2階ドームホールで行われた。ウィーン自然史博は、オーストリア皇室が購入・収集してきた歴史と由緒のある、量質ともに圧倒するコレクションを基礎にした、約3000万点の収蔵品を誇る世界有数の博物館である。フランツ・ヨーゼフ1世が1876年に設立し1889年に公開したという。

1階正面ロビーから2階への折り返し階段ホールを上がるとアリストテレスからフンボルトにいたる8人の哲人の石造が迎えてくれる。そして、カフェレストランとして使われているドームホールまで上がると、優に20mはあろうかという吹き抜け天井とそれを支える8角形の壁と柱に圧倒される。8角形は開館時の8つの部門を象徴しており、地質学、古生物学、鉱物学、動物学、植物学等の銘板とそれぞれの学問をイメージする様々な彫刻や絵画で装飾されている (写真2)。

Ice BreakerはK/Pg境界隕石衝突環境事変の研究でも知られた地質学者のChristian Köberl館長の挨拶で始まった。欧米、中東、南米と旧知の研究者が多く、アジアからの参加者は少数派であったが、ふるまわれたハウスワインや地ビールと軽食で和やかな盛会となった。巨大な展示室は照明されて開放され、グラスを片手に鉱物・化石・生物・考古などの膨大な標本を見ることもできた。さながら、ナイトミュージアム・パーティであった。

#### 開会セレモニー

初日午前の開会セレモニーでは、実行委員長のWagreich教授から白亜紀国際シンポジウムの歴史の概要や意義、そしてその成果が紹介された。ウィーン大学と学部を紹介をされた。地球科学・地理・天文学部長の挨拶によれば、大学全体で学生数94,000名、教授420名、大学教職員数9,500名に達するという。地球科学・地理・天文学部でも、24名の教授、500名のスタッフ、3,300名の学生を擁す

るという。

その後、オーストリア地質学会のEduard Suessメダルの授賞式と記念講演が行われた。アルプス研究で名高いウィーン大学地質学教授の名を冠するこの賞は1918年に創設され、今回は28回目となる。Herbert Stradner博士は、ナノ化石層序研究の先駆者として知られた重鎮で、1962年に命名された *Lithastrinus grilli* がシンポジウムのロゴの右端にあしらわれていた。シンポジウムの要旨集には古海洋学の重鎮のWilliam Hay氏や海水準曲線で知られたBilal Haq氏の祝辞が写真入りで掲載されていた。

#### 口頭発表セッション

シンポジウムはUZA IIの中央部にある3教室で、大抵は3会場、時に2会場で平行して口頭発表セッションが行われた。近年の白亜紀研究の動向を把握できるように、セッションタイトルをいくらか要約してそれぞれの発表件数を上げておこう。提案されたものの幾つかは合併されて整理されている。最終プログラムで確認できる口頭発表の件数は193件であった。

T1. Part 1 Sessions on the Cretaceous Stages and Boundary Definitions: Jurassic/Cretaceous ~ Cretaceous/Paleogene境界の各階の層序とGSSP設定について (42件)

T1. Part 2 - Sessions on Cretaceous Chemo-Sequence-, Cyclostratigraphy and Climate Changes (15件)

T2. Cretaceous Setting and Facies (計27件)  
F01 Cretaceous terrestrial/non-marine studies (15件)

F03 Cretaceous Carbonate platforms, Chalk facies and biota & Geoparks (12件)

T3. Cretaceous Events (計29件)  
E01+E02 Cretaceous environmental perturbations - Anoxia, OAEs, oxic events, K/Pg boundary (19件)

E03 Deciphering Cretaceous environmental and climate perturbations by means of high-resolution bio-chemostratigraphic and geochemical approaches (10件)

T4. The Cretaceous Greenhouse World-Climate & Sea-Level Changes (計40件)

C04 Early Cretaceous climate variations and its impact on paleoecology and paleoenvironmental developments (14件)

C05+C08 Climate-environmental deteriorations during greenhouse phases: Causes and consequences of short-term Cretaceous sea-level changes (IGCP 609) (18件)

C06 Asia-Pacific Cretaceous Ecosystems (IGCP608) (4件)

C07 Comparison between the marine and continental records during Cretaceous greenhouse states (Songliao Basin and WIS) (4件)

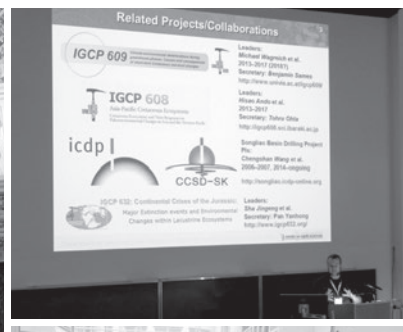


写真1 (左) ウィーン大学地球科学・地理・天文学部地球科学棟 (UZA II: University Center Althanstraße Haus 2)。写真2 (中央) 歓迎パーティ (Ice Breaker) 会場のウィーン自然史博物館2階ドームホール。写真3 (右上) IGCP609セッションでのプロジェクト紹介。演者はプロジェクト書記のBenjamin Sames氏 (ウィーン大)。スライドはIGCP609, 608, 632, ICDP Songliao Basinの連携を紹介。写真4 (右下) 初日のポスターパーティの様子。UZA IIの薬学部棟1階ロビー。

#### T5. Cretaceous Palaeontology (計30件)

P04+P05 Cretaceous biodiversity (micropaleontology/ macropaleontology) (8件)

P06 Cretaceous vertebrates (3件)

P07 Palaeobotany and Palynology (14件)

P00 Open Session on Cretaceous palaeontology (5件)

#### T6. Cretaceous Hydrocarbon and Mineral Deposits (3件)

#### T7. Cretaceous Geodynamics and Orogeny & Evolution of Tethyan Realm (7件)

なお、1, 3, 4日目の午後一番には1会場と1時間の招待講演が行われ、要所で全員が集まり最新の研究成果の総説を聞く場が設けられていた。1日目はIUGS国際層序学委員会の白亜系小委員会委員長のMaria Rose Petrizzo氏による白亜紀層序学の進展、3日目はHelmut Weissert氏による中生代の炭素循環と気候変動、4日目はMarina Suarez氏による白亜紀における古土壌と気候指標の講演であった。

#### IGCP608セッション

IGCP608として中国のメンバー2人と共同提案したセッションでは、3日目の午前に計4件の口頭発表と1件のポスターがあった。小さなセッションであったが、アジアで活動するIGCP608の存在感は示すことができた。メンバーの大半がアジア諸国からであることや、10月下旬に韓国で第5回国際シンポジウムの開催を予定していることを考慮すると無理もないと感じた。なお、メンバーの中にはIGCP609と重複して活動していたり、テーマに近い他のセッションで発表しているケースもあるので、裾野はもっと広がっている。

4日目午前一番のIGCP609セッションの総括講演では、Benjamin Sames氏がIGCP608,

632, ICDP Songliao Basinと協同した活動について紹介してくれた (写真3)。とりわけ、白亜紀シンポジウム自体も上記の3プロジェクトとIGCP609のメンバーが中心になって行われており、UNESCO-IGCP本部が重視する複数プロジェクト間の協力や連携の指針に沿って進めていることが示された。

#### ポスターセッション

ポスターは薬学部棟のホールに設置されたポスターブースに4日間貼ったままのスタイルであった。1日目午後の休憩後の2時間にメインのポスターパーティが行われ、活発な議論が各所で見られた。しかし、ポスター間隔も通路も狭く、複数の参加者が一度に見聞きするには難があった (写真4)。3日目午後にもポスターパーティの時間が設けられていたが、こちらは1会場の口頭セッションと平行していたので、集中力が欠けた雰囲気であった。

合計100件がプログラムに示されていたが、いくつかはキャンセルとなっており、特に中国からのキャンセルが気になった。第9回のシンポジウムでも口頭セッションを含め、途上国登録者からの無断キャンセルが相次ぎ運営に支障があったが、今回は口頭、ポスターともに数件あったにせよ、大きな難はなかったように感じられた。

#### 閉会セレモニー

最終日午後の休憩の後、閉会セレモニーの前半ではWagreich実行委員長からシンポジウムの総括やシンポジウム論文集の計画が紹介された。Cretaceous Research, Newsletters on Stratigraphyやロンドン地質学会特別号等でテーマ別に論文募集をすることになるとのことである。

この後、次回 (第11回) のシンポジウムの開催地提案として、3カ国 (ジョージア (旧ゲ

ルジア)、レバノン、ポーランド) の代表から招待プレゼンテーションがあった。いずれもそれぞれ地質学的な魅力や特徴があることが分かった。その上で、100名強の参加者から挙手で投票が行われ、ポーランドが選出された。

最後に委員長をはじめ実行委員、そして、一番働き回ったBenjamin Samesに満場の感謝の拍手が送られて閉会となった。

なお、今回の集会の発表要旨と巡検案内書はオーストリア地質調査所報告の第120号、121号として出版され、Website (以下のURL) で閲覧できるようになっている。

<https://www.geologie.ac.at/en/>

#### 第11回はポーランドワルシャワで

2021年の夏期に次回の白亜紀シンポジウムはワルシャワ大学を中心に行われる。ホストはイノセラムス研究者として日本でも知られているワルシャワ大学のIreneusz P. Walaszczyk氏が引き受けることとなった。

日本における白亜紀研究の実績に比べ、日本人参加者が極めて少ないので、次回は若手を中心に多数の参加を期待したい。

#### 地質巡検

巡検は会議前が3コースで、PRE-1: テチス北東縁の上部白亜系 - 古第三系 (8/17-20の4日)、PRE-2: スロバキア西部カルパチアの中下部白亜系 (8/18)、PRE-3: ウィーン中心街の白亜系建物 (8/20午後)、会議後が1コースでPOST-3: Eduard Suessの足跡に見るユースタシーと海水準変動 (8/25)、の計4コースが実施された。安藤はPRE-2と3に参加した。提案されたうち、3コースは催行定員に満たずキャンセルとなった。

今回の集会では、ウィーン大のWagreich教授とBenjamin Sames氏には大変にお世話になった。この場をかりて感謝したい。





矢島道子（日本大学文学部）

『日本の地質学100年』（日本地質学会、1993）の、中国関連の記述に誤りがあると中国科学史家・武上真理子氏（元京都大学人文科学研究所）より指摘を受けた。戦前の中国での地質学研究の記述である。上記100周年記念本を所持されていたら、訂正してほしい。

### 周年記念本

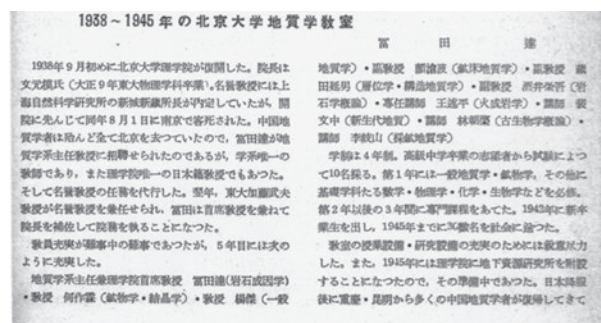
日本地質学会は戦後、周年記念本を3冊出版している。1953年に60周年記念本、1968年に75周年記念本と、1993年に上記の100周年記念本である。海外地質調査については60周年記念本が実際に現地の機関に勤務していた地質技術者によって記述されていてくわしい。75周年記念本では特に関係の章はなく、表形式で多少の情報が記述されている。100周年記念本では岡野武雄氏（元工業技術院地質調査所）が「第4章 第二次大戦前・中の海外地質調査」を執筆している。岡野氏が緒言で述べているように、60周年記念本、75周年記念本、あるいは東京地学協会の取り組んだ『東亜地質産誌』等を基にして編集したものである。

### 上海自然科学研究所

最初の誤りは436ページの上海自然科学研究所の記述「1926年12月に設置」として書かれているところである。1926年12月に「大綱」は出来上がったが、この時には予備研究が立ち上げられただけで、研究所の設置がされたわけではない。研究所の正式な開所は1931年4月、建物の竣工は同年6月である。60周年記念本では尾崎金右衛門が執筆しており、「1926年12月には上海自然科学研究所設置を議決した」と記述され、「研究所の建設をまたずに直ちに中国における興味ある研究を開始した」とのことである。「この予備研究時代には…研究したが、…1928年に済南事件が勃発したため、中国側委員は総辞職をなした」と記述は続いている。

### 北京大学

同じページに、北京大学についての項目があり、「1923年9月、北京大学理学院が再開した」と始まる。しかし、この「1923年」は全くの間違いである。60周年記念本では「1938～1945年の北京大学地質学教室」を富田達が記述している。1923年という文字は一切現れない。「1938年9月初めに北京大学理学院が復開した」と記述は始まる。「院長は文元模氏（大正9年東大物理学



60周年記念本における北京大学の記述。

科卒業)」、「中国地質学者は殆ど全て北京を離れて去っていたので、富田達が地質学系主任教授に招聘せられたのであるが、学系唯一の教師であり、また理学院唯一の日本籍教授でもあった。そして名誉教授の任務を代行した」という記述が続く。その後、東大の加藤武夫が1年後に名誉教授に就任し、富田は首席教授となる。5年後には体制が整い、地質学系には10人の教師がそろった。日本人は富田のほかに、蔵田延男、酒井栄吾がいた。

武上氏によれば、北京大学の「正史」では、1937年以降に北京大学が日本人によって「再開」されたという事実は、完全に抹消されているようだ。さらに、私は、2014年に北京で開かれた国際地質科学史シンポジウムに参加したが、中国の地質学史の中にアメリカ人、フランス人等は登場するのだが、日本人地質学者は誰一人登場しなかった。歴史研究において正しい事実を突き止めていくことは重要で、小さな誤謬はすみやかに修正されなければならない。

なお、これまでの周年記念本に誤りが見つかった場合には、できるだけ早くお知らせください。誤りは修正していきたいと思っています。

### 文献

日本地質学会、1953、『日本地質学会史：日本地質学会60周年記念』

日本地質学会、1968、『日本の地質学：現状と将来への展望』

日本地質学会、1993、『日本の地質学100年』

産業技術総合研究所地質調査総合センター（以下「地調」、旧通商産業省工業技術院地質調査所）の地質図は、1/20万図が北方領土を除く全国122区画（110図幅、うち2区画合体図幅が12）を、1/5万図が全国の約6割（1274区画のうち760）をカバーし、凡例を統一した1/20万全国シームレス地質図も提供されている。北海道については、国土交通省北海道局（旧北海道開発庁）及び北海道立総合研究機構地質研究所（旧地下資源調査所）による地質図も含めると、全道のほとんどの1/5万図が出版済みである（未出版は7区画）。そしてこれらのすべての地質図とその説明書が、地調のホームページにて無料で閲覧・ダウンロードできる（<https://www.gsj.jp/Map>）。これらの地質図は学校や社会における地学教育にも非常に有用であるが、どの地質図がどのようなテーマの教材として役立つかを示したガイドが、これまで無かったように思う。私は仕事柄全国の地質図を見る機会が多いので、その経験に基づいてテーマごとに地質図の「見どころ案内」を試みる。以下のリストでは、テーマを五十音順に並べ、各テーマをよく表現している地質図の名称を挙げ、そのうち特に見事な百景に●を、1/20万図には「20」を、火山地質図には「△」を、特殊地質図には「☆」を付した。優れた地質図は、見る者に地質プロセスのダイナミズムを感じさせるが、どの地質図にも調査者の趣向や考え方、作成当時の学界のレベルや流行学説が色濃く反映されており、作成者や出版年によく注意して利用する必要がある。これらの地質図には半世紀以上昔のものも多く、そこに表現された事実や解釈が全て正しいわけではないので、最新の文献を参照するなど、使用者の責任において活用していただきたい。拙稿に貴重な改善意見をいただいた竹内圭史会員に感謝する。

#### 項目名（五十音順） 図幅名（北から南へ）

圧砕岩→マイロナイト / 埋立地→沖積地、溜池 / エクロジヤイト ●新居浜

オフイオライト（玄武岩、斑れい岩、蛇紋岩等の複合岩体）  
幌加内、千呂露、幌尻岳、●20夕張岳、20浦河、●早池峰山、万場、寄居、三河大野（御荷鈴）、鋸崎、小浜、舞鶴、綾部、●福知山（夜久野）、小滝、大江山、若桜、上石見、多里

オールドビス系（日本最古の地層）早池峰山、小滝、●上高地（福地）、伊野（日立のカンプリア系は地質図未出版）→

地層、チバニアン / 温泉→変質帯  
屋簷堆積物 乙忠部、摩周湖、●落合、西達布、大雪山  
海成（海岸）段丘 札文島、●焼尻島、●奥尻島、乙忠部、音標、雄武、寿都、久遠、松前、大間、佐井、大畑、●鯨ヶ沢、深浦、象潟（飛鳥）、館山、珠洲岬・能登飯田及び宝立山、高砂

海底地質 ●渡島福島（青函トンネル）、20窪川、薩摩硫黄島（鬼界カルデラ）、20宮古島、20魚釣島 →活断層（海域）→別に各地の海洋地質図がある。

河成（河岸）段丘 ●陸奥、20北見、上士幌、中士幌、高島、十勝池田、糠内、忠類、遊楽部岳、館、知内、米内沢、刈和野、鷹ノ巣、青梅、八王子、●東京西南部、20東京、横浜、見附、浜松、岐阜、四日市、亀山

鍵層 ●高島（水平）、●清川、柏崎、小千谷、富津、五百石、師崎、半田、津東部、桑名、水口、京都東北部、大阪東北部、岸和田、三田

花崗岩体（巨大なもの）●太平山、土淵（遠野花崗岩）、千厩（千厩岩体）、浪江及び磐城富岡、原町及び大甕、川俣、川

前及び井出（阿武隈花崗岩）、真壁（筑波）、飯田、妻籠、足助、水口、宮津、●広島、根雨、内之浦、屋久島西南部、20屋久島

累帯深成岩体 ●千厩（折壁岩体）、石動（宝達山花崗岩）、御在所山（鈴鹿花崗岩）

ルーフペンダント 三峰、飯田、妻籠、三津、●巖島（西能美島）

火山（火山地質図）（数字はスケール、万分の1単位、他項では△で示す）30勝、3樽前、25有珠（2版）、5北海道駒ヶ岳、25岩手、25蔵王、3那須、25草津白根、5浅間、25伊豆大島、25三宅島、1青ヶ島（及び海底火山）、25九重、5阿蘇、25雲仙、5霧島、25桜島（2版）、25口永良部島、2諏訪之瀬島（火山関係の特殊地質図（他項では☆で示す））●5富士（2版）、25鬼首、10八甲田地熱地域（八甲田、十和田、碓ヶ関）、10仙岩地熱地域（岩手山、秋田駒ヶ岳等）、10栗駒地熱地域（栗駒、鳴子、鬼首等）、10豊肥地熱地域（九重等）→泥火山 / →活断層（火山体を切る）

火山（カルデラ）屈斜路湖、摩周湖、阿寒湖、20斜里、樽前山（支笏）、徳舜誓、登別温泉（倶多楽）、虻田（洞爺）、濁川、20野辺地（恐山）、☆八甲田（十和田、碓ヶ関）、☆鬼首、☆栗駒（鬼首、鳴子、向町）、宮下（沼沢）、田島（塔のへつり等）、△阿蘇、20熊本、●20大分（阿蘇）、20八代（加久藤）、●20鹿児島（始良）、開聞岳（池田）、20開聞岳（“阿多”）、薩摩硫黄島（鬼界）→コールドロン

火山（成層火山、火山地質図を除く）利尻島、20留萌（暑寒別岳）、大雪山、旭岳（トムラウシ）、20旭川、歌志内（イルムケツ）、然別湖、留寿都（羊蹄山）、岩内、狩太（ニセコ）、恵山、渡島大島、大畑（燧岳）、五所川原、弘前（岩木山）、●鳥海山及び吹浦、20仙台（月山、肘折等）、二本松（安達太良山）、燧ヶ岳、男体山、須坂（四阿山）、沼田、20宇都宮（赤城山）、●榛名山、苗場山、飯山（毛無山）、●戸隠（飯綱山・黒姫山）、20長野、諏訪（霧ヶ峰）、蓼科山、八ヶ岳、御岳昇仙峡、20甲府（茅ヶ岳）、修善寺（天城、達磨）、御蔵島、八丈島、立山（弥陀ヶ原）、乗鞍岳、御嶽山、大山、三瓶山、20中津（両子山）、20熊本（多良岳、金峰山）、開聞岳、薩摩硫黄島

火山（単成火山群）伊東、20高梁（北西部）、●小値賀島、富江（噴石（スコリア）丘等）

火山（マール）利尻島（沼浦）、●戸賀及び船川（目湯火山群）、大島（波浮）、加治木（米丸・住吉池）

火山（溶岩ドーム（円頂丘）、火山地質図を除く）新島、●神津島、金沢（戸室山）

火山深成複合岩体→コールドロン

火山灰（火砕流）台地 ●20斜里、20釧路、20標津、20根室（屈斜路・摩周・阿寒）、美瑛、志比内、下富良野、佐幌岳、10勝岳、●20旭川（十勝岳）、樽前山、千歳、20札幌（支笏）、虻田、留寿都（洞爺）、十和田、八甲田、青森西部、黒石（十和田・八甲田）、岩ヶ崎、古川（鳴子・鬼首）、榛名山、宮原、竹田、●20大分、20熊本、20福岡（阿蘇）、都城、野尻、国分、鹿屋、20鹿児島、20宮崎（始良）

化石（アンモナイト等）達布、上芦別、●幾春別岳、紅葉山（付図）、陸中野田、気仙沼、万場、荒島岳、白杵、日奈久、魚貫崎及び牛深、中畝 / ガス田→油田

活断層（陸域）歌棄（黒松内）、青森西部（黒石、入内等）、喜多方（会津盆地西縁）、●青梅（立川）、横須賀（武山・北武）、熱海（丹那）、松本（松本・牛伏寺）、飯山（飯山・



常盤), 飛騨古川, 白木峰, 東茂住, 五百石 (跡津川・牛首), 加子母, 付知, 妻籠 (阿寺), 谷汲, 根尾 (根尾谷), 北小松 (花折), 上野 (木津川), 広根, 京都西南部 (有馬・高槻構造線), 大阪東北部, 大阪東南部 (上町, 誉田, 生駒), 神戸, ●大阪西北部, 須磨 (五助橋等), 宮津 (郷村, 山田), 鳥取南部 (鹿野・吉岡), 龍野, 佐用, 山崎 (山崎), 新居浜, 20松山 (中央構造線), 福岡 (警固等) 活断層 (海域) 20長岡, 20新潟 (2版), 20横須賀, 20静岡及び御前崎, 今庄及び竹波, ●20松山, 豊後杵築, 20中津, 20大分 (2版), 20八代 活断層 (火山体を切る) 鳥海山及び吹浦, ●△雲仙, △那須 (環礁を切る) →サンゴ礁 岩床群 (主にドレライト) 母衣月, ●蟹田, 小泊, 油川, 金木, 太良鉾山 (田代岳), 阿仁合 (2版), 雫石, ●大沢 (青沢), 清川, 栗島, 坂城 / 岩屑流→流山 岩脈群 利尻島 (放射状), 知床岬, 札内岳, 八海山, ●越後湯沢, 大島, ●御蔵島, 父島列島, 20豊橋及び伊良湖岬 (設楽コールドロン), 京都東北部, 呉, 倉橋島及び柱島, ●浦郷 (放射状), 石垣島東北部 かんらん岩体 ●幌泉 (幌満), 新居浜 (東赤石) / グラニユライト ●20夕張岳 玄武岩台地 郷ノ浦, ●呼子, 唐津, 平戸, 伊万里, 佐世保, 蛸ノ浦, 20唐津, 20長崎 向斜→褶曲 / 黒曜石 ●白滝, 諏訪 (和田峠), 20長野, 神津島 (砂糠山), 姫島 (観音崎の城山溶岩) 鉾床・鉾物 上落滑 (竜昇殿 (北鎮) 水銀), 下川 (銅), 上支湧別 (イトムカ水銀), 定山溪 (豊羽黒鉾帯), 太良鉾山 (黒鉾帯), 足尾 (銅, 砂川一郎氏の鉾物記載), 東茂住 (神岡スカルン), ●荒島岳 (中竜スカルン), 吉野山 (大和水銀), 大屋市場 (明延銅), 生野 (銅), 周匝 (柳原黄鉄鉾), 温泉津及び江津 (石見銀山=大森鉾山), (伊予) 三島 (佐々連銅), 新居浜 (別子銅), 川内 (串木野金) →石灰岩体, 炭田, 油田 コールドロン (火山深成複合岩体) 湯沢 (院内), 上高地 (笠ヶ岳), 20豊橋及び伊良湖岬 (設楽), 20岐阜 (荒島岳), 那智, 20田辺, 20木本, 20伊勢 (熊野), 播州赤穂, 20浜田 (掛合 (北東部), 波佐 (南西部)), 20山口及び見島 (益田, 田万川 (北東部)), 20高知 (石鎚 (北西部)), 竹田, 三重町, 三田井, 熊田, 諸塚山, 延岡, ●20大分, ●20延岡 (大崩山), 尾鈴山, 都農, 富高, 神門, 20延岡 (尾鈴山) 砂丘・浜堤 抜海, 稚咲内, ●浜頓別, 金木, 五所川原, 角田, 新潟及び内野, ●茂原, 御前崎, 津東部, 津幡, 鳥取北部, 宮崎 サンゴ礁 ●多良間島 (環礁とそれを切る活断層), 宮古島 (米間島の活断層) 隆起サンゴ礁 (琉球石灰岩) 糸満及び久高島, 那覇及び沖縄市南部, 石垣島東北部 山体崩壊堆積物 白馬岳 (1911年稗田山崩壊), ●御蔵山 (1984年伝土崩壊) →流山 地すべり 立牛, 余別及び積丹峠, 原歌及び狩場山, 相沼, 戸隠, ●飯山, 珠洲岬・能登飯田及び宝立山, 冠山, 新居浜, 日比原, 大洲 蛇紋岩体 (蛇紋岩メランジュ) ●敏音知, 20枝幸, 石狩金山, 岩知志, 三石, 20夕張岳, 早池峰山, 大迫, 人首, 20盛岡, 小滝, 白馬岳, 20富山, 大江山, 上石見, 多里, 20高梁, 伊野, 三重町, 犬飼, 鞍岡, 砥用, 日奈久 褶曲 宗谷及び宗谷岬, 沼川, ●紅葉山, 早来, ●20高田, 大町, 根尾, 和歌山及び尾崎, 粉河, ●20徳島, 20岡山及び丸亀, 仁位 (対馬) →単斜構造 背斜 (ドーム) 留萌, 浜益, 上芦別, ●雄別, 20釧路, 20

青森, 大沢, 松之山温泉, 高田東部, 高田西部, 大町, ●谷汲, 20岐阜, 栗栖川 (アンチフォームを含む) 向斜 (ベーズン) 上猿払, 20枝幸, ●遠別, 初浦, 端野, 西徳富, 館, 気仙沼, ●栃木 (足尾帯), 檜ヶ岳 (薬師岳付近), 信濃池田, 城端 (シンフォームを含む) 撓曲 十和田, 津西部, 桑名, 水口, ●大阪東北部 重力異常と地質の対応 ☆栗駒, 珠洲岬・能登飯田及び宝立山, ●境港 衝上断層 ●大夕張, 山部, 能代, 森岳 (能代衝上), 羽後和田, 本荘 (北由利衝上), 酒田 (酒田衝上), 寄居 (跡倉ナツプ, 金勝山クリッペ), 清水 (糸静線則沢クリッペ), 東茂住, 白木峰, 八尾 (横山衝上), 根尾 (徳山衝上), 御在所山 (竜ヶ岳クリッペ), 彦根東部 (霊山クリッペ), 若桜 (蛇紋岩が三郡変成岩に衝上), 津山東部 (美作衝上), 蒲江, 延岡, 諸塚山, ●神門, 椎葉村, 村所 (延岡衝上) 石灰岩体 20八戸, 20盛岡 (安家), ●栃木, 20宇都宮 (葛生), 根尾, 谷汲, 美濃, 近江長浜, 彦根東部, 20岐阜, 20名古屋 (舟伏山・伊吹山・霊山), 20高梁 (阿哲・帝釈), 20山口及び見島 (蔵目喜・秋吉), 20福岡 (平尾台など), 20大分, 白杵, 20延岡, 20八代 (秩父帯) →サンゴ礁 扇状地 八王子, 青梅, ●長野 / 剪断帯→マイロナイト / 溜池と埋立地 ●高砂 単斜構造 (地層の) 遠軽 (高角, 諸説あり), ●姉崎 (低角), 坂城 (ほぼ水平) →褶曲 段丘→海成段丘, 河成段丘 / 断層→活断層, 衝上断層, マイロナイト 炭田 (炭層と炭鉾) 築別炭礦, 歌志内, 砂川, 夕張, 大夕張, 吉岡 (仙台北方), 川前及び井出, ●平 (常磐), 宇都東部, 大牟田 →別に各地の炭田図がある. 地溝帯 ●万場 (山中地溝), 邑知潟 (邑知地溝), 白木峰 (利賀地溝), △雲仙 (雲仙地溝) 地層 (各地質時代の代表的な地層, 付加体を除く) →オルドビス系, チバニアン, 付加体 シル・デボン・石炭系 ●早池峰山, 20盛岡, 20一関, 上高地, 伊野, 砥用, 日奈久 ペルム (二畳)・トリアス (三畳)・ジュラ系 ●登米, 気仙沼, 志津川, 20一関, 20石巻 白亜系 ●20夕張岳, 陸中野田, 和歌山, 粉河, 小倉, 折尾, 魚貫崎及び牛深, 中甕 古第三 (古成) 系 20札幌, 20夕張岳, ●平, 母島・父島列島, 小倉, 折尾, 福岡 新第三 (新成) 系 20留萌, ●戸賀及び船川, 小千谷, 柏崎, 五百石, 八尾 第四系 ●茂原, 姉崎, 富津, ●東京西南部, 横浜, ●大阪東北部, 奈良 チバニアン (第四系更新統千葉階 (提案中), 正しくは「チバン」か) 日本油田・ガス田図No. 4「富津・大多喜」(北端部) 及び☆1/10万「東京湾とその周辺」の上総群国本層中に同階の基底がある (模式地は田淵西方の養老川, Ku2鍵層の約20m下). 1/5万「大多喜」は未刊行だが, 「茂原」に北東延長部の説明あり. 沖積地・埋立地 鶴岡, ●新潟及び内野, 名古屋南部, 名古屋北部, 津島, 佐賀 →泥炭 →別に各地の水理地質図がある. 泥炭 (湿原) 稚咲内, ●大柴毛, 石狩, 札幌, 恵庭, 長万部, 八雲 / 泥火山 ●静内 流山・岩屑流堆積物 △有珠山, 大沼公園, 駒ヶ岳, △北海道駒ヶ岳, 五所川原 (岩木山), 象潟, 矢島 (鳥海山), 雫石 (岩手山, 小岩井農場付近), ●鶴岡 (月山), 喜多方 (磐梯山), 飯山 (毛無山), △浅間山,

小諸 (浅間山), △雲仙, △霧島 (夷守岳) → 山体崩壊堆積物 / 熱水→変質帯 / 背斜→褶曲  
 氷河堆積物 旭岳, ●幌尻岳, ●槍ヶ岳, 立山, 小滝, 白馬岳, 上高地 / 浜堤→砂丘  
 付加体 立牛, 20浦河 (日高帯), 早池峰山 (根田茂帯・北部北上帯), 三峰, 五日市 (秩父帯, 四万十帯), 館山, 那古, 横須賀 (中新世付加体), 南部, 清水 (瀬戸川帯), 下呂, 八幡, 美濃, 谷汲, 今庄及び竹波 (美濃帯), 西津, 熊川, ●北小松\*, 京都東北部, 京都西北部, 園部, 四谷, 綾部 (丹波帯), ●山上ヶ岳, 龍神, 栗栖川, 江住, 北川, ●20字和島, 三重町, 蒲江, 熊田, 延岡, 椎葉村, 尾鈴山, 村所, ●末吉\*, 砥用, 湯湾 (秩父帯, 四万十帯), 小倉 (秋吉帯) (\*デュープレックス構造)  
 不整合・基底礫岩 生田原, 木古内, 志津川, 妻及び高鍋, 宮崎, ●日向青島, 都井岬  
 変質帯 (熱水・温泉) 愛別, 国領, 雄冬, 大畑, 須坂, 諏訪, 御岳昇仙峡, 八ヶ岳, 下田, ●神子元島, 母島列島, 豊後杵築 → 鉾床  
 変成帯 (広域) 落合, 御影, 札内岳, 札内川上流, 神威岳, 上豊似, 築古岳, 20夕張岳, 20浦河 (日高帯), 三石 (神

居古潭帯), 白木峰 (飛驒帯), 高遠, 市野瀬, ●御油, 足助, 奈良, 岩国 (領家帯), 寄居, ●新居浜, 日比原 (三波川帯), 砥用 (肥後帯)  
 変成帯 (接触) 仁宇布, 滝上, 早池峰山, 釜石, 須原, 足尾, 市野瀬, ●御油, 北小松, 横山, 根雨, 20巖原 (対馬南部), ●熊田, 椎葉村, 村所, ●鹿屋, 20徳之島  
 マイロナイト (ミロナイト, 圧砕岩, 剪断帯) 上支湧別 (日高帯), 20夕張岳, 20浦河 (日高主衝上), 20甲府, 20豊橋及び伊良湖岬, 20伊勢, 高遠, ●吉野山, 岸和田 (中央構造線), 魚津, 東茂住 (飛驒帯) / マール→火山  
 ミグマタイト ●上豊似, 神威岳, 築古岳, 幌泉 (日高), 竹貫 (阿武隈)  
 油田・ガス田 羽後浜田, 秋田, 酒田, ●新潟及び内野, 柏崎, 20新潟, 20長岡, 20千葉, 20東京 → 別に各地の油田・ガス田図がある。  
 流紋岩体 (巨大なもの) 加子母, 付知, 金山, ●下呂, 萩原, 三日町, 飛驒古川, 20飯田, 20高山 (濃飛流紋岩), 近江八幡 (湖東流紋岩) → コールドロン, 火山灰台地  
 累帯深成岩体・ルーフペンダント→花崗岩 (以上)



## 筑波大学生命環境科学研究科 博士後期課程地球進化科学専攻では



社会人のための早期修了プログラムを開設しております。

本プログラムは、一定の研究業績や能力を有する社会人を対象に標準修業年限が3年である博士後期課程を最短1年で修了し、課程博士号を取得するプログラムです。

1. 対象: 地球進化科学専攻の各研究領域 (分野) と関連した研究業績を有する社会人 (本研究科の社会人特別選抜合格者) で、早期修了プログラムによる課程博士の取得を希望するもの。
2. 提出書類
  - ・早期修了希望調書 (最終学歴・専門分野、業務内容と志望分野の関係等)
  - ・業績リスト (査読付き学術論文、口頭発表資料他)
  - ・自己評価書
  - ・博士論文の構想 (A4版2~4枚程度、書式自由、課題や関連分野の調査等)
3. 申請条件: 筆頭著者の原著論文2編以上 (査読付き国際学術雑誌に掲載済みもしくは受理・掲載可・印刷中 (in press))
4. 平成30年度2月期入試は平成30年2月1日 (木) に行われます。口述試験 (個別面接) 修士論文 (またはこれまでの研究) 及び入学後の研究について発表をして頂きます。

説明会: 東京キャンパス文京校舎 平成29年11月5日 (日) 13:30~15:00  
 筑波キャンパス (春日地区) 平成29年11月17日 (金) 18:30~20:00

早期修了プログラムの詳細 <http://www.souki.tsukuba.ac.jp/>  
 地球進化科学専攻 <http://www.geol.tsukuba.ac.jp/application.html>



Islands Arcは、2016年より隔月出版となりました。最新号のVol. 26, Issue 5が2017年9月に発行されました。学会ホームページから会員ログインすると全文がオンラインで無料閲覧できます。是非ご覧下さい。

(Island Arc編集委員会)

## Vol. 26, Issue 5 (September)

### [Research Article]

#### 1. Elasmobranch fauna from the upper most part of the Cretaceous Bagh Group, Narmada valley, India

Guntupalli V. R. Prasad, Vishal Verma, Ashok Aahni, Ranjit Singh Lourembam and Rajkumari Priyadarshini

インドのナルマダ川地域の白亜系バグ層群最上部から産した板鰐亜綱フォーナ

インドの白亜系サメ類は、インド半島デカントラップ挟在層の最上部白亜系とインド南部のカーヴィリ堆積盆の上部白亜系下部（セノマニアン）カライ層から知られている。デカントラップ挟在層のサメ類は主にエイ、ガンギエイで特徴付けられるのに対し、カライ層フォーナではカグラザメ目、ツノザメ目、ネズミザメ目が知られている。後者のフォーナでは、いくつかの汎世界的な種類に加えて、冷温帯水域の種が卓越する。この論文ではインド西部ナルマダ川下流域の海成白亜系バグ層群最上部から採取されたサメ類歯化石について報告する。本論はバグ層群からのサメ化石の初となる詳細な記載であり、この海成層の最も新しい層準（コニアシアンからマストリヒシアン後期）からの最初のサメ化石記録である。バグ層群最上位層準のユニット（サンゴ石灰岩）の最上部にある、カキ殻多産緑色砂岩から採取されたフォーナからは、*Ptychodus* sp., *Scapanorhynchus* sp. aff. *S. raphiodon* (Agassiz, 1844), *Cretodus* sp. aff. *C. crassidens* (Dixon, 1850), *Cretalamna* sp., *Squalicorax* sp. aff. *S. falcatus* Agassiz, 1843と板鰐亜綱の不明種に同定された。この群集は、以前より南北アメリカ、ヨーロッパ、北・西アフリカ、極東、近東域の白亜紀堆積物から広く記録されているが、インドのサメ類群集構成において、後期白亜紀前期の冷温帯水域の種類から後期白亜紀の本質的に汎世界的な種類へと、明瞭な変化があったことを示している。

Key Words：白亜紀，バグ層群，サメ，ナルマダ川，インド

#### 2. Pollen and spores from early Cretaceous in Guyang Basin of Inner Mongolia, China and their palaeoclimatic and palaeoecological significance

Peihong Jin, Jingwei Chen, Zixi Wang, Xiaohui Xu, Guoling Yang, Baoxia Du and Bainian Sun

中国内モンゴルのグヤン堆積盆から産する前期白亜紀花粉・孢子とその古気候学的・古生態学的意義

白亜紀の気候と植生の研究は現在の環境を理解する上で重要である。本研究では、古生態の理解に有用な、独特な大型化石

と多様な花粉・孢子群を産する内モンゴルの下部白亜系グヤン（Guyang）層に焦点をあてる。研究対象とした花粉・孢子群から総計56属が同定され、それらは球果植物門に属するスギ科が卓越し、さらにソテツ類や、イチョウ類も多い。シダ類はカンクサ科やヘゴ科が卓越する。現生植物群集の地理的分布や孢子形態生態群モデル（SEG）に基づいた定量的分析によれば、この植物群はボドザミテス類、トウヒ属、マキ属の卓越する針葉樹林の存在を示しており、それらのグループに加えて、シダ類やその他のシダ植物門からなる密生する草冠および下層植生を伴い、湖成淡水藻類も含んでいたことを示唆している。この化石植物群はその当時、温暖湿潤な亜熱帯気候にあったことを示している。

Key words：花粉・孢子，グヤン層，下部白亜系，古気候，古生態

#### 3. The Cretaceous coal-forming plants of southern part of East Siberia and Russian Far East

Eugenia V. Bugdaeva and Valentina S. Markevich

東シベリア南部および極東ロシアにおける白亜紀の石炭生成植物

バイカル周辺地域（ヒロク、チターインゴダ、ブカチャチャ、タルガー・ハラノールの各堆積盆）、アムール川地域（ブレア堆積盆）、そして沿海州地域（ラズドルナヤ川とバルチザンスク川の堆積盆）から前期白亜紀の石炭層を形成した植物化石が初めて得られた。石炭を生成した植物は主に、イチョウ類（*Pseudotorellia*, *Sphenobaiera*, *Baierella*）、ベネチテス類、そして絶滅したケイロレビス科、ミロビア科植物に加え、マツ科、スギ科、ナンヨウスギ科などを類縁とする球果植物に属している併用した花粉学的研究では、ヘゴ科、ウラジロ科、ゼンマイ科、フサシダ科のシダ植物に加えて、上に挙げた要素の多くが同定された。

Key words：石炭生成植物，白亜紀，アムール川地域，ザバイカル地域，沿海州地域

#### 4. Serpentinities and serpentinites: Variety of origins and emplacement mechanisms of serpentinite bodies in the California Cordillera

John Wakabayashi

様々な蛇紋岩：カリフォルニア州コルディレラの蛇紋岩体の起源と定置機構の多様性

造山帯にある蛇紋岩化したかんらん岩の多くは海洋リソフェアに由来するが、岩体の性質や相互関係が示す様にそれらの定置機構は様々である。多様な定置機構は、オフィオライト岩体の産状と大規模な造山プロセスを結び重要な示唆を有している。カリフォルニア州コルディレラではCoast Range ophiolite (CRO) のように最大の超マフィック岩体は上盤プレートの一部をなしていたオフィオライトシートの一部である。このようなユニットは付加したFranciscan Complexのオフィオライト小岩体とは異なる。Franciscan Complexの蛇紋岩はまた海底地すべりによって海溝に堆積した後に部分的に沈み込んだ堆積性メランジェとして産出する。高圧変成岩を含む堆積性メランジェはCROを被って堆積したGreat Valley Groupの前弧海盆堆積物中にも出現する。異なる蛇紋岩の起源を識別することはカリフォルニア州コルディレラでさえ難しい。沈み込んだ後で



り破壊が進んだ典型的な造山帯では、産状の異なる蛇紋岩体のタイプを識別することは非常に困難である。

Key words: 蛇紋岩, かんらん岩, オフィオライト, 前弧海盆, 高压変成岩類, メランジェ, 海溝-前弧テクトニクス

## [Review Article]

### 5. Varieties of the Himalayan eclogites: a pictorial review on textural and petrological perspectives

Hafiz Ur Rehman, M. Qasim Jan, Tahseenullah Khan, Hiroshi Yamamoto, Yoshiyuki Kaneko

ヒマラヤ産エクロジャイトの多様性: 画像による岩石構造の概観  
Hafiz Ur Rehman, M. Qasim Jan, Tahseenullah Khan, 山本啓司, 金子 慶之

パキスタン北部, ヒマラヤ西部地域の塩基性変成岩類(主にエクロジャイト)を画像によって概観する。同地域のカーガン・バレーおよびニーラム・バレーには、緑色片岩, 角閃岩, ざくろ石角閃岩, エクロジャイト, 角閃岩化したエクロジャイト, およびざくろ石岩が岩脈, 岩床, あるいはレンズ状岩体として産出する。本稿では、まず「エクロジャイト」という用語の歴史的背景を述べ、次にヒマラヤ西部の塩基性変成岩類の様々な産状を記述し、個々の岩型について標本から顕微鏡スケールの岩石学的記載を行う。最後にヒマラヤの塩基性変成岩類の起源, およびエクロジャイトに至るまでの変成過程についての知見を取りまとめ、インドとアジアの衝突テクトニクスの枠組みにおけるヒマラヤ変成帯の形成メカニズムを展望する。

Key words: ヒマラヤ, エクロジャイト, 超高压, 岩石記載, 組織, カーガン・バレー, パキスタン

## [Research Article]

### 6. Early Jurassic intra-oceanic arc system of the Neotethys Ocean: constraints from andesites in the Gangdese magmatic belt, south Tibet

Xuxuan Ma, Zhiqin Xu, Joseph Meert, M. Santosh

ジュラ紀初期のテチス海における海洋島弧システム: チベット南部のGangdese火山帯からの制約

Gangdese火山帯はチベットの南部, Lhasaテレーンの南縁に位置している。本論文では、Bima層群に産出する安山岩中のジルコンのウラン-鉛年代とHf同位体比および安山岩の全岩化学組成とストロンチウム-ネオジム同位体比を示し、Gangdeseの火成活動史とテチス海の進化について検討する。六試料のジルコンのウラン-鉛年代は170 Maの噴火年代を示す。またジルコンのHf同位体比( $\epsilon_{\text{Hf}}(t)$ )は平均が+15.2であり、+13から+16の(枯渇したマントル由来の)値を示す。全岩組成やSr-Nd同位体比は大陸由来の堆積物の影響を受けた枯渇したマントル源の部分融解を示唆しており、現在の小アンチレス島弧の南部地域と類似している。これまでの公表されたデータも考慮すると、Bima層群の火山岩類は、テチス海の海洋リソスフェアが北に向かって沈み込むことによって形成された海洋島弧で噴出した、と考えられる。

Key words: 安山岩, ジルコンの年代とHf同位体比, マグマの進化, Gangdese, チベット, テチス海

### 7. Chemostratigraphy of the Ediacaran basinal setting on the Yangtze platform, South China: Oceanographic and diagenetic aspects of the carbon isotopic depth gradient

Seishiro Furuyama, Akihiro Kano, Yoko Kunimitsu, Tsuyoshi Ishikawa, Wei Wang and Xin-chun Liu

古山精史朗・狩野彰宏・国光陽子・石川剛志・王 偉・刘 欣春

南中国の揚子地塊上には、浅海域~海盆地で堆積したエディアカラ系が広く分布しており、多細胞動物進化と古環境変動の関係を解明する上で格好のフィールドとなっている。しかし海盆地からのデータは限定的で、浅海域との層序対比が確立されていない。そこで本研究では浅海域~海盆地間の層序対比を目的として、海盆地で堆積した中国湖南省鳳灘地域の下部エディアカラ系陡山沱層を対象に、有機・無機炭素及びストロンチウム同位体比による同位体層序を明らかにした。これらを浅海域(湖北省三峡地域)で報告されているものと比較した結果、負の無機炭素同位体比異常が認められる鳳灘地域の陡山沱層下部をガスキエス氷期(582 Ma)とされる層準に、同層上部をシェラムエクスカッションとされる層準に、それぞれ対比できた。両地域間で無機炭素同位体比に深度勾配が認められることから、当時の海盆地は還元的環境に支配されており、有機物やメタンの嫌氣的分解で放出された炭素が両地域の無機炭素同位体比に影響したと考えられる。

Key words: エディアカラ紀, 化学層序対比, ストロンチウム同位体比, 続成作用, 炭素同位体比, 南中国

### 8. The petrogenesis and implications of deformed late Caledonian-early Hercynian granites in the Wuyi area, South China

Xilin Zhao, Yang Jiang, Guangfu Xing, Minggang Yu, Kai Liu, Zhihong Chen and Shengyao Yu

中国南部, 武夷地域の变形した後期カレドニア~初期ヘルシニア花こう岩類の成因とその意義

先カンブリア時代の基盤岩類はカレドニア造山運動の熱変成作用を受けている。よって先カンブリア時代の基盤岩からカレドニアの年代を示すジルコンが得られた場合、それは熱変成作用によるものかもしれない。しかしながら、ヘルシニア造山運動の年代は非常に稀である。SHRIMPによるジルコンのウラン-鉛年代によると、Huyan, LingdouおよびPengkouの花崗岩体のジルコンは二つのグループに分けることができる。ひとつはカレドニアの火成活動に対応する410-400 Maの年代を示すグループで、もう一つは368-354 Maの片麻岩状組織をつくりだした変形年代をしめすグループである。上記、三つの花崗岩体はSタイプのhigh-Kカルクアルカリ系列の過アルミナ岩である。ストロンチウム同位体初生値は0.71045-0.72486,  $\epsilon_{\text{Nd}}(t)$ 値は-7.33から-10.74であり、ネオジムの2-ステージモデル年代は1.65-1.93 Gaを示す。火成由来のジルコンの $\epsilon_{\text{Hf}}(t)$ は-3.79から-8.44であり、 $T_{\text{DMC}}$ 年代は1.65から1.93 Gaである。これらのデータによると、花崗岩体は古原生代から中生代の大陸地殻が部分融解して生成したことを示唆している。Cathaysia岩塊内ではWuyiとMinyue微小大陸の衝突が起こっており、福建省の南西にSタイプの花崗岩を形成している。約360Maを示すジルコンのウラン鉛年代は、このCathaysia岩体の形成に関係する変形年代を示しているのかもしれない。

Key words: ジルコンウラン鉛SHRIMP年代, カレドニアン後期, 変形した花崗岩, Cathaysia岩体, 微小大陸, 南シナ

## 9. Rapid cooling and geospeedometry of granitic rocks exhumation within a volcanic arc: A case study from the Central Slovakian Neovolcanic Field (Western Carpathians)

Milan Kohút and Martin Danišik

火山弧における花崗岩体上昇における冷却と地質速度計: 中央スロバキア新生代火山地域 (西部カルパチア山脈) の事例研究として

本研究ではジルコンのSHRIMP U-Pb年代測定とジルコンとアパタイトの(U-Th)/He年代測定を併用することにより, 中央スロバキア新生代火山地域 (西部カルパチア山脈) の最も若い花崗岩の位置と上昇履歴に制約を与える。Banky地域の閃緑岩とBanská Hodruša地域の花崗閃緑岩の2試料において, それぞれ  $15.21 \pm 0.19$  Maと $12.92 \pm 0.27$  MaというジルコンのU-Pbコンコーディア年代が得られ, これらはジルコン晶出と岩体貫入時期を示している。Banky地域 (閃緑岩) とBanská Hodruša地域 (花崗閃緑岩) のジルコンの(U-Th)/He年代はそれぞれ $14.70 \pm 0.94$  Maと $12.65 \pm 0.61$  Maであった。また, アパタイトの(U-Th)/He年代はそれぞれ $14.45 \pm 0.70$  Maと $12.26 \pm 0.77$  Maであった。この結果は, それぞれの試料に対応するジルコンのU-Pb年代に比べ, 100万年以下しか若くない。これらの閃緑岩と花崗閃緑岩の結果は, 中期中新世において, マグマの結晶化/固化温度から地表近くの温度まで単に冷却したことを示している。地質速度計による結果から, 冷却の平均速度は $678 \pm 158$  °C/Myr, その上昇速度5 mm/年となり, 活動的な造構運動による上昇と一致する。この冷却速度は, 本研究地域の花崗岩質岩複合岩体が定置後すぐに上昇したことを示すと解釈され, 同地域の火成活動の停止に伴う古地温勾配の急降下に伴っているようである。

Key words: 崗岩質岩, ジルコンU-Pb年代測定, ジルコンとアパタイトによる(U-Th)/He年代測定, 地質速度計, 中央スロバキア新生代火山地域, 西部カルパチア山脈

## 10. Metamorphic condition of a regional metamorphic complex in the Omuta district in northern Kyushu, southwest Japan

Takeshi Ikeda, Kazuhiro Miyazaki and Hirohisa Matsuura

北部九州大牟田地域の広域変成岩類の変成条件

池田 剛・宮崎一博・松浦浩久

九州北部の大牟田地域には高温変成岩類が産し, 泥質岩の鉱物組合せより北から南に変成度の上昇に伴い, 緑泥石-黒雲母帯, 白雲母-紅柱石帯, 珪線石-カリ長石帯の3帯に分帯される。2本のアイソグラーフの走向はほぼ東西で, 南東に位置する玉名花崗閃緑岩との境界面と斜交する。白雲母-紅柱石帯と珪線石-カリ長石帯の2つの泥質岩の変成条件は, それぞれ $510 \pm 30$ °C,  $300 \pm 60$  MPaと $720 \pm 30$ °C,  $620 \pm 60$  MPaと見積もられた。本研究は, 同一の地質温度圧力計を適用した場合に圧力差の精度が高いことを示し, 2試料の圧力差が $320 \pm 10$  MPaであることを明らかにした。このことは, 現在 6.8 km 離れた2試料が11~12 km異なる深さで変成したことを意味する。つまり, 高温変成作用後に地殻が薄層化したことを意味する。従って, 本地域の高温変成作用は静的接触変成作用でなく, 動的

の広域変成作用であると結論された。本研究の成果と岩石学のおよび年代学的類似性より, 本地域の高温変成岩類は領家変成作用を被ったことが示唆される。

Key words: 相対温度圧力計, 高温変成作用, 領家変成岩類

## 11. Water contents of clinopyroxenes from sub-arc mantle peridotites

Michael Turner, Simon Turner, Dawnika Blatter, Rene Maury, Michael Perfit and Gene Yogodzinski

島弧下マンツルの輝石の含水量

交代作用を受けたマンツルかんらん岩中の輝石が地球内部における水のキャリアーとしてどの程度重要な役割を果たしているのか, これまで十分に理解されていない。本研究では, 4ヶ所の沈み込み帯 (メキシコ, カムチャッカ, フィリピン, ニューブリテン) およびプレート内部 (西ビクトリア) に産する, 交代作用を被ったマンツルゼノリス中の輝石を対象に, SHRIMP-SIを用いて含水量を予想的に測定した。その結果, 沈み込み帯起源のマンツルゼノリス中の輝石含水量は70~510 ppmであり, ゼノリス全体としての含水量は88~3737 ppmと推定された。一方, プレート内部起源のマンツルゼノリスの含水量は3447 ppmと推定された。交代作用を受けたマンツル物質は, リソスフェアの底部で蓄積するか, もしくは対流によって輸送されたマンツル深部において, 角閃石の分解に伴い水を放出している可能性がある。

Key words: 含水量, 輝石, マンツルかんらん岩, 島弧下マンツルゼノリス, プレート内部マンツルゼノリス

## 12. A high-T metamorphic complex derived from the high-P Suo metamorphic complex in the Omuta district, northern Kyushu, southwest Japan

Kazuhiro Miyazaki, Takeshi Ikeda, Hirohisa Matsuura, Tohru Danhara, Hideki Iwano and Takafumi Hirata

西南日本北部九州大牟田地域における高圧型周防変成コンプレックスから転移した高温型変成コンプレックス

宮崎一博・池田 剛・松浦浩久・檀原 徹・岩野英樹・平田岳史

北部九州大牟田地域のミグマタイト質泥質片麻岩中のジルコンU-Pb年代より以下のことが明らかとなった。(i) 高圧型周防変成コンプレックスから高温型変成コンプレックスへの転移が起こった。(ii) 周防泥質岩中の碎屑性ジルコンは1900-1800 Maと250 Maの2つの主たる年代成分をもち, 高変成度変成岩地域から供給されたものが存在する。(iii) 高温型変成作用の年代として $105.1 \pm 5.3$  Maが得られた。高圧型から高温型への転移は弧-海溝系における火山弧の海側への移動, もしくは高圧型変成コンプレックスの海溝側から火山弧側への移動を意味する。これらの移動は前期白亜紀に起こった。分布トレンド及び変成年代より, 大牟田地域高温型変成コンプレックスは領家深成変成コンプレックスの西方延長と見ることができる。高圧型から高温型への転移は, 西南日本内帯ジュラ紀付加コンプレックスの分布トレンドが白亜紀中頃の高温型変成場の分布トレンドと斜交することも示している。

Key words: ジルコン, 高温型変成コンプレックス, 高圧型変成コンプレックス, 領家

## 委員会だより

### ★125周年記念事業実行委員会

#### 125周年記念事業について

創立125周年である2018年のスタートまであと3か月足らずとなりました。

これまで、ニュース誌や学会ホームページに125周年記念事業について適宜掲載してきましたが、会員の皆様にさらにご理解いただき、そして創立125周年をより盛り上げるために、「125委員会報告」として、125周年記念事業の催し、出版物などについてニュース誌に連載することになりました。

今回は、125周年事業の一覧とそれらの進捗状況についてご説明します。

#### 1. これまで実施した記念事業（継続事業含む）

- ①会長による「日本地質学会創立125周年を迎えるにあたって」の年頭挨拶  
2017年1月（ニュース誌Vol.20, No.1掲載掲載）
- ②記念事業の概要紹介  
2017年1月（ニュース誌Vol.20, No.1掲載）
- ③記念ロゴの選考と学会行事での活用  
2017年1月から（選考は2016年5月から）（ニュース誌Vol.20, No.1以降掲載）
- ④記念ポスターの学会行事での活用  
2017年1月から（ニュース誌Vol.20, No.1以降掲載）
- ⑤記念連載「トリビア学史」  
2016年8月から、2017年8月現在11編掲載。2017年10月まで、合計13編掲載予定（ニュース誌Vol.19 No.8以降掲載）
- ⑥記念地質学雑誌特集号  
創立100年から25年間の研究レビュー誌的なもの。2017年4月より掲載開始。2017年4号、6号に2分野掲載（2017年8月現在）。2018年中に合計16分野掲載予定（地質学雑誌Vol.123, No.4以降掲載）
- ⑦記念事業のための寄付のお願い  
2017年1月から受付中。目標額：個人会員350万円、賛助会員、企業・団体150万円。（ニュース誌Vol.20, No.1以降掲載）  
個人会員 88名 247口（1口5,000円）123.5万円（達成率：35.3%）  
賛助会員 13団体 22口（1口50,000円）110万円

企業・団体 19団体 24口（1口50,000円）120万円  
団体小計 46口 230万円（達成率：153.3%）  
2017年8月末現在 合計 353.5万円（達成率：70.7%）

#### 2. 今後実施予定の記念事業

- ①記念出版「はじめての地質学」  
ベレ出版 四六版約250頁 1728円（税込）。2017年9月中旬より店頭販売開始。124年学術大会（2017愛媛大会：9/16-18）において特別販売。
- ②記念出版「県の石（仮称）」  
現在作成中。2018年3月刊行予定。
- ③記念クリアファイル  
地球惑星フォトコンテストの作品を活用 3枚セット500円。124年学術大会（2017愛媛大会：9/16-18）より販売開始
- ④記念ジオルジュ英語版  
2018年に通常号とは別に1冊刊行予定。
- ⑤記念支部事業  
松田副会長が中心となって、各支部と調整中。2017愛媛大会で支部長会議を開催して、検討を進める。
- ⑥記念式典  
2018年5月18日（金）東京都北区北とぴあにて開催予定。  
2018年1月に詳細を案内予定  
午前：記念報告「地質学会125年の歩み」、記念講演「地質学はどこで生まれ、どこへ行くのか」会場は400名収容可。  
午後：記念表彰式：学会の単年度の表彰とは異なり、学会内外への普及、運営活動や社会貢献に対して、およそ10団体・個人を表彰。125委員会が選考中。  
夕方：記念祝賀会：招待者50名、学会参加者（有料）100名の規模を予定  
なお、2018年の総会は記念式典の翌日（5月19日(土)）に行い、引き続き理事会を行う予定。
- ⑦記念学術大会での記念行事  
2018年9月の125年学術大会で記念行事を行う。内容を検討中。
- ⑧記念会員証  
2017年11月の役員選挙関連通知書のなかに記念会員証を同封して、会員の皆様に送付予定。2018年5月の記念式典、9月の記念学術大会以降、学会の総会や学術大会時に参加受付や名札として活用する。



☆関東支部

案内

# 八丈島地熱巡検「再生可能エネルギーと地質学」のお知らせ

関東支部では、八丈島の地熱巡検を実施します。八丈島を構成する2つの第四紀火山のうち、東山の地下には、温度300℃に達する日本有数の高温・高圧熱水系が発達します。八丈島は、地表の地熱兆候に乏しく、地熱開発により初めてその存在が見出されました。今回の巡検では、地熱発電所見学や宿舎での勉強会にて、この熱水系の特徴、形成、発電利用について学習した後、火山地形、東山火山噴出物露頭、地熱兆候地の観察等を通じ、理解を深めて頂きます。また、地域共生型の開発事情もご紹介し、再生可能エネルギー開発と地質学の関連について考えます。

主催：日本地質学会関東支部

開催日：2017年11月24日（金）～25日（土）（雨天決行、交通機関欠航の場合は中止）

募集人数：12～20人

CPD単位：9単位

講師：松山 一夫（株）地熱総合研究所、元東電設計株式会社）

費用：25,000円（宿泊費、マイクロバス代、保険代等）

※航空券代は含みません。

見学予定内容（現地集合・現地解散）

11月24日 八丈島空港（集合：13:30）⇒ 八丈島地熱館（発電所PR館）、町営温泉井 ⇒ 宿舎（勉強会を予定）

11月25日 宿舎 ⇒ 町営温泉井、東山火山噴出物露頭、自然湧出泉、東山火山地形、爆裂火口、寄生火山 ⇒ 八丈島空港（解散：16:00）

申込方法：詳細を、関東支部ホームページ（<http://kanto.geosociety.jp>）でご確認の上、メールにて下記担当幹事にお申し込みください。（航空券等は各自手配）

申込期限：10月31日（先着順） ※空路をご利用の方は10月中旬までを目安に、なるべく早く航空券をご手配ください（関東支部ホームページに交通機関のご案内記載）。

問合せ・申込先：関東支部幹事 富田一夫（とみたかずお）日鉄鉱コンサルタント㈱

メール [tomita@nmconsults.co.jp](mailto:tomita@nmconsults.co.jp)

藤、笠間の2名）。

参加者は、実施1ヶ月前から、地質学および地質図学演習の課題が与えられた。実施初日は、京大生が東京大学千葉演習林清澄宿舎に到着する前に、歩測や走向・傾斜の計測の練習をした。2日目以降は、京大生とともに、日中は七里川およびその支流で沢歩きをし、夜はルートマップとフィールドノートへの墨入れ・柱状図の作成を行った。参加者は完成するまで寝られない。コンビニも無い人里離れた場所で缶詰状態になって肉体的にも頭腦的にも追い込まれることになるが、参加者にとって貴重な体験となったと思う。最終日に、参加者には関東支部発行の修了証が渡された。

今年は天気に恵まれたが、ハチが非常に多く、1名がハチに刺され、途中リタイアとなった。極めて残念であった。また、今年はタクシーを利用したが、問題点は、座席シートを汚さないために着替えや履き替えの靴を持って行かねばならないこと（結局、荷物は京大の車中へ）、露頭を磨くためのデッキブラシなどの教育上大事な道具が持ち込めなかったこと、緊急時にタクシー呼ぶことに大変不便を感じたことである。

開催にあたり、京都大学の山路 敦先生、成瀬 元先生、佐藤活志先生、TAの羽地俊樹氏、石原大亮氏から多大なるご支援を賜った。また、関東支部側の指導者として石油資源開発株式会社より成沢紗也佳氏と古角見洋氏、株式会社ダイヤコンサルタントより大中原平氏を派遣していただいた。東京大学千葉演習林の方々には、いろいろとご協力をいただいた。以上の方々に厚く御礼申し上げる。

（関東支部幹事：加藤 潔 駒澤大学）

## 参加者の感想

私は普段、大学では地形学を学んでいるので、地形と深く関わりのある地質について学びたいと思い、今回参加させていただきました。地質学会の指導陣の方々や京都大学の先生方に様々なことを教えていただきながらなんとか一週間を過ごすことが出来ました。

特に印象に残った体験は、一つ一つの露頭を時間をかけて細かく観察することで、次に露頭を違う場所で発見した時に、顔つきや粒径、それらを構成する重鉱物から前日に見つけた露頭と同じものが出てくる、と分かった時の喜びはひとしおでした。さらに、ルートの途中で断層を発見し走向や傾斜をはかること



メンバー集合写真。左より加藤（支部幹事）、古角（JAPEX）、栗本（専修大）、吉村（東村山市）、石橋（専修大）、小塚（専修大）、笠間（支部幹事長）

☆関東支部

報告

## 清澄フィールドキャンプ 実施報告

2017年 8月21日から26日にかけて、京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻地質学鉱物学の先生方の御指導・御支援のもと、石油資源開発株式会社、株式会社ダイヤコンサルタントの協力を得て、関東支部は清澄フィールドキャンプ（地質調査の演習）を共同実施した（参加者5名、現地指導担当幹事は加

によって地層がどのように切られているのかを推測できるということにもとても驚き、感動しました。

今回は一週間という短い時間で地質調査の基本的な事柄を教えていただきましたが、これで満足せずに今後も地質調査の面白さを忘れず、自主的に地質に関してさらに勉強し、今後の大学での研究などに活かしていければと考えています。

末筆ながら、今回お世話になった地質学会の皆様、京都大学のご指導いただきました先生方、学生の皆様本当に有難うございました。

(石橋真那美 専修大学3年)

私はこれから卒論を書く上でしっかりと地質調査の技術が必要になると考え、このフィールドキャンプに参加しました。京都大学の学部生の方達のプログラムに同行する形で参加しましたが基礎知識や道具の運用方法がしっかりと身に付いている方が多く、とても感心しました。

フィールドキャンプは6日間あり、ほぼ毎日作業を繰り返し行うと言った内容でした。毎日測定や記載といった作業をする内に、段々と要領がわかり最終日には6日間で行った作業をしっかりと自分のものにできたと思います。

この6日間で学んだことを忘れず、これからの研究に活かしていきたいとおもいます。

(栗本享育 専修大学3年)

地質調査とはどのようなものを学ぶために、このキャンプに参加しました。初めは地質構造を理解できず、走向傾斜や岩相などを記載する単なる作業となっていました。しかし指導者の皆様にフィールドや夜業でひとつひとつ丁寧に教えていただき、三日目・四日目は地質構造を理解しながら調査することができました。また、初日は警戒していたヤマビルに日が経つにつれて恐怖心が薄れていくことに自分自身で驚きました。5泊6日の実習で体力・頭脳ともに疲弊しましたが、とても充実した

日々を過ごすことができました。このキャンプで学んだことを生かし、今後の研究を進めていきたいと思います。

(小塚朋子 専修大学4年)

私は東京の公立中学校で理科の教諭をしています。好きな地学分野を教えるのに、このフィールドキャンプを通して新たな視点が得られると考えチャレンジしました。事前の宿題を通して基礎の確認と必要な知識を身に付け、また準備を進める中で地質調査に必要な装備や沢歩きに適した足回りを研究し、体をサポートするスポーツタイツの存在も知ることができました。初日には歩測やルートマップの描き方を学び、2日目の調査では、走向板を使い「層理面の三点を確保し、これを保持するため手を露頭に密着させ測定する」など、手取り足取り具体的に教えて頂き大変勉強になりました。また、困っている様子を見て声をかけてくださるのも助かりました。地図の上でのコンパスを使った現在地の確認がとても大切なことや、岩相の見方・記載の仕方も教わりました。さらに調査中に遭遇する危険生物への対処の仕方も教わりました。作業は、何回も走向・傾斜を測り断層や鍵層となる凝灰岩層を記載していくことの積み重ねでしたが、これが地域全体の断層配列や褶曲、さらには地史の大きな理解に繋がることが分かり、スケールの大きさを感じました。初めのうちは皆さんに何とか付いて行けたのですが、毎日の調査と夜遅くまでの墨入れや柱状図描きの末、調査4日目には疲労がピークに達しました。しかし、教えて下さった諸先生方や行く先々で露頭を磨いて下さったTAの方々は、さらに“しんどい”のだと感じました。我々生徒を導き育てるために、大変な無理をしておられることに、そしてフィールドに分け入りコツコツ調査研究をされていることに、尊敬の気持ちで一杯になりました。この一週間、一つ一つ具体的な体験を積み重ね、また様々な指導を受けることができ、とても充実し貴重なものとなりました。本当に有り難うございました。

(吉村成公 東京都東村山市立東村山第二中学校教諭)

地質リーフレットたんけんシリーズ5

## ながとろ 長瀬たんけんマップ

あらかじめ きざ まど 荒川が刻んだ地球の窓をのぞいてみよう



編集：日本地質学会長瀬たんけんマップ編集委員会

(高木秀雄・本間岳史・露木和男)

発行：一般社団法人日本地質学会

A2版8折 両面フルカラー印刷

「ジオパーク秩父」の  
重要なジオサイトのひとつ  
長瀬のたんけんマップができました



定価400円  
(会員頒価300円)

※20部以上ご注文の場合は割引あり

購入希望の方は、学会事務局まで、e-mail: main@geosociety.jp 電話: 03-5823-1150



研究室紹介  
九州大学地球進化史研究室

九州大学大学院理学府地球惑星科学専攻  
地球進化史研究室 修士2年

牧野帆乃香

九州大学 固体地球惑星科学講座

九州大学理学部地球惑星科学科は「流体圏・宇宙圏科学」、「固体地球惑星科学」、「太陽惑星系物質科学」および「地球惑星博物館」の4つの大講座に分けられ、地球深部から宇宙圏までの幅広い分野に関連した自然科学を取り扱う。本学科は1990年に「地球惑星科学」の名が冠せられる以前は「地質学科」の名称で呼ばれており、後に物理学科の数講座と統合し現在の形となった。4大講座の一つ、地質学科時代からの歴史を引き継ぐ「固体地球惑星科学講座」には火山学、地震学、地球深部物理学、古環境学、岩石学や地質学など、地球表層から地球深部にかけての固体地球に関連した各分野の研究室が所属する。本紹介文では固体地球惑星科学講座の地球進化史研究室の紹介のみに留めるが、固体地球惑星科学講座の他の研究室や、他の3つの大講座でも大変興味深い研究を行っているの、興味のある方は是非チェックして頂きたい。

固体地球惑星科学講座に所属する学生の進路としては、研究職または学生時代の研究に関連する一般企業への就職か、教員、公務員を目指す者が多い。ここ数年の筆者の周辺では、地質コンサルタント会社、研究機関、防災関連企業、資源系企業、学芸員、メーカー、鉄道会社、銀行、公務員などへ進路が決定している。いずれにせよ工学部などに比べ就職難と言われる理学部だが、近年では就職状況は改善してきているようである。

さてここからは筆者が所属する地球進化史研究室の紹介をしていく。

地球進化史研究室

今回紹介することとなった地球進化史研究室は固体地球惑星科学講座に所属する。教員は佐野弘好教授、清川昌一准教授であり、2017年8月現在で博士課程4名、修士課程5名および学部生1名の計10名の学生が日々研究に励んでいる。佐野先生は国内外の付加体地質を主に研究しており、特に石灰岩研究を専門としている。佐野先生は今年度退官される予定で最終講義を

2018年3月に控えている。清川先生は現在、主に太古代から原生代の岩石を研究対象としており、当時の海洋の堆積環境の復元を試みている。その他にも五島列島から見る日本海拡大の構造発達史や、薩摩硫黄島長浜湾で見られる鉄沈殿堆積物のモダンアナロジーの研究などを行っている。

本研究室の研究対象は地球表層の岩石・地層である。それらが「いつ、どこで、どのようにして、どんな歴史を経ていま私たちが見るような岩石・地層になったのか」を明らかにし、地球史スケールでの環境変動を復元することを主な目的とする。そのため本研究室では地質学、堆積学、層序学、地球化学に関連した研究が多く行われている。ほとんどの学生がフィールド調査を基礎に研究を行っており、フィールドは国内外を問わない。研究テーマの具体例としては、日本国内に分布する付加体の層序復元や、海外ではガーナ、エジプト、ブラジル、カナダなどに分布する地層についてのコアサンプリング、フィールド調査、化学分析等が挙げられる（詳細はメンバー紹介の研究テーマを参照）。

研究室での生活風景を一部紹介する。学生が取り組む研究テーマは人それぞれであるため、薄片作成や化学分析などのサンプル処理、データ処理、参考文献の読解などを各々がやっている（写真1）。週1のゼミでは教員や学生から鋭い質問が飛ぶ中、研究進捗や論文レビューの報告・発表を行う。そのほか学会発表や論文執筆など、全国の大学院生たちと同じく、研究に追われる日々を送っている。化学分析等で外部機関を利用させて頂く機会や、フィールド調査、野外巡検も多いため、研究室にメンバー一同が会する場面はそれほど多くない。そんな日々の中、メンバー同士や他研究室の学生と昼食、夕食を共にして休憩する姿をよく見かける（写真2）。またキャッチボールやバドミントン、時にはソフトボール大会やバーベキューなど、学生らしい息抜きもしつつ日々を送っている。余談だが、九州大学理学部キャンパスは平成27年に福岡市東区の箱崎地区から、西区の伊都地区に移転が完了しており、研究棟は新品同然である。数年後には文学部や農学部などの移転も控えており、以前に比べ伊都キャンパス周辺も少しずつ活気が出てきているようだ。

九州大学理学部地球惑星科学科では野外実習が年に複数回開催されている（写真3）。九州横断巡検、天草実習、能古島巡検などで福岡や長崎、大分、熊本などの地域の地質の成り立ちを、学生たちが実際にその場所を歩いて考える。他にもハワイでの火山実習などを行っている。本研究室のメンバーは、学部生時代にこれらの実習に参加し、フィールド調査、地質研究に興味を持つようになった者がほとんどである。

メンバー紹介

地球進化史研究室に現在所属する学生10名の研究テーマと一言コメントを取材した。九州大学の学生は九州出身の者が多い

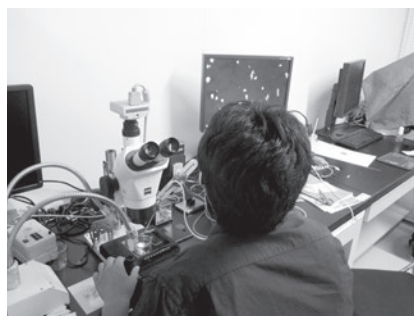


写真1：研究風景。写真はジルコンピッキングの様子。



写真2：研究生生活の昼食風景。研究棟の休憩スペースで学生達がうどんを囲んで談笑。



写真3：九大地球惑星科学科で開講される堆積学実験の巡検風景。宮崎県宮崎市鬼の洗濯板。2017年6月。



## 院生コーナー

が、他地域の学生も勿論多く在籍する。また今年度後期から本研究室に新たに東ティモールの留学生が入学するため、研究室内の日常会話やゼミ発表でも少しずつグローバル化が進んでいる。

名前（学年）出身

〔研究テーマ〕

「一言」

### 【博士課程】

三木 翼 (D3) 福岡県

〔硫黄同位体比を用いた32億年前の海洋環境復元〕

「一度はビルバラに行きたい。」

吉丸 慧 (D1) 長崎県

〔ガーナビリミアン帯の形成史復元, 原生代初期の表層環境復元〕

「卒業までに西アフリカ全体の地質をもっと見て回りたいです。」

鈴木大志 (D1) 和歌山県

〔エジプトEl Dabbahの0.7 Gaの鉄鉱層〕

「今しかできないことをしたい。」

堀田千二海 (D1) 福岡県

〔三疊紀中期の海洋環境の復元〕

「不屈の精神力を養いたい。」

### 【修士課程】

金子大作 (M2) 福岡県

〔長崎県五島列島奈留島の層序復元〕

「フィールド調査の技術をもっと高めたい！！」

坂井志緒乃 (M2) 千葉県

〔ガーナビリミアン帯から掘削されたGHBコアの詳細な岩相層序と深海底環境の復元〕

「初期原生代の地層であるガーナビリミアン帯から掘削されたGHBコアの堆積環境復元と、ヌスタマンガニ鉄床との比較による酸化還元環境の復元を目指しています。」

牧野帆乃香 (M2) 愛知県

〔カナダMarble Canyon石灰岩の堆積環境復元〕

「もう一度カナダにフィールド調査に行って、ついでに観光もしたい。」

元村健人 (M1) 熊本県

〔1.9 Gaの海洋環境〕

「地質はロマンであふれている。」

酒本直弥 (M1) 岡山県

〔鹿児島県薩摩硫黄島長浜湾の海水の色変化と気象の関係〕

「調査全力で頑張ります。」

### 【学部生】

Yang Jaehyeon (B4) 韓国

〔山口県西部豊浦町の豊西層群石灰岩の岩相〕

「卒業研究がんばります。」

### おわりに

このようなメンバーが和気あいあいと研究に勤しんでいる。今後学会等で皆さまにお会いする機会があれば、どうぞよいをお願いしたい。

常時投稿をお待ちしています。院生コーナーの編集は現在以下の4名で行っています。原稿は5000字以内、図・写真3点以内を目安に、e-mailでいただければ幸いです。

16nd204l@vc.ibaraki.ac.jp  
manto.yamada@gmail.com  
smuto@eps.s.u-tokyo.ac.jp  
716o.nonn@gmail.com

羽田裕貴（茨城大）  
山田真嵩（首都大）  
武藤 俊（東京大）  
大山 望（九州大）

## 創立125周年記念

# 学会オリジナルクリアファイル



学会創立 125 周年記念事業のひとつとして、オリジナルクリアファイルを製作しました。ファイルには、惑星地球フォトコンテストの入選作品など、富士山やその他国内で撮影された美しい画像を使用しました。海外に「日本の地質」を紹介するツールのひとつとしても活用していただければと願っています。

A4 対応 両面フルカラー 3種類 1セット **定価 500 円**

(注) 3枚1セットでの販売となります。単品のご注文はお受けできません。

お申し込みは、学会事務局まで

FAX: 03-5823-1156 e-mail: main@geosociety.jp



日本地質学会会員の皆様へ 特別割引販売のお知らせ

## 日本地質学会編集 日本地方地質誌 <全8巻完結>

『日本地方地質誌』刊行委員会 刊行委員長:加藤碩一 副刊行委員長:高橋正樹

### 第8回配本 2. 東北地方 712頁, 口絵6頁 (10月上旬刊行)

編集委員長:吉田武義

**定価 29,160 円(税込)を会員特別割引価格 25,500 円(税・送料込)**

日本地質学会会員の皆様に日本地方地質誌を特別割引価格で販売をいたします。お申し込みは、下記用紙にて直接朝倉書店までお願いいたします。 日本地質学会「日本地方地質誌」刊行委員会

事務手続き代行:株式会社 朝倉書店

[問い合わせ先] 〒162-8707 東京都新宿区新小川町 6-29

株式会社 朝倉書店 編集部:千葉 Tel. 03-3260-1963

[お申し込み] 本ページをコピーのうえ、ファクシミリまたは郵送にて上記までお送り下さい。

[お支払方法] 振替用紙を送付いたします。入金確認後、書籍をお送りいたします。

**注意: 会員特別割引は、一般書店・大学生協ではご利用できません。**

### 会 員 特 価 申 込 み 書

Fax No. 03-3268-1376 朝倉書店編集部 千葉 行

日本地方地質誌 1. 北海道地方	会員特価 24,700 円 (本体 26,000 円 + 税)	冊
日本地方地質誌 2. 東北地方	会員特価 25,500 円 (本体 27,000 円 + 税)	冊
日本地方地質誌 3. 関東地方	会員特価 24,700 円 (本体 26,000 円 + 税)	冊
日本地方地質誌 4. 中部地方	会員特価 23,200 円 (本体 25,000 円 + 税)	冊
日本地方地質誌 5. 近畿地方	会員特価 21,100 円 (本体 22,000 円 + 税)	冊
日本地方地質誌 6. 中国地方	会員特価 23,200 円 (本体 25,000 円 + 税)	冊
日本地方地質誌 7. 四国地方	会員特価 25,600 円 (本体 27,000 円 + 税)	冊
日本地方地質誌 8. 九州・沖縄地方	会員特価 24,700 円 (本体 26,000 円 + 税)	冊

お名前:

ご送付先: 〒 -

ご所属:

tel.

fax.

備考: 公費等の場合は、請求先・必要書類をお知らせ下さい。

## 出版物在庫案内

ご希望の方は代金を添えて本会事務局宛お申込みください。なお、2冊以上のお申込みにつきましては送料をお問い合わせください。

現金書留または郵便振替 00140-8-28067

40号以前の論集については、一部在庫がございます。院生・学生4割引、正会員2割引で販売しております。ご希望の方は学会事務局までお問い合わせ下さい。No. 40以降の論集：院生・学生のみ2割引

### 地質学論集

- 第40号 中央構造線のネオテクトニクス—その意義と問題点—。岡田篤正ほか編，250pp.，1992年12月刊，会員頒価3,200円， $\yen$ 350円
- 第41号 中部九州後期新生代の地溝。長谷義隆ほか編，192pp.，1993年6月刊，会員頒価3,100円， $\yen$ 300円
- 第42号 西南日本の地殻形成と変遷。小松正幸ほか編，357pp.，1993年4月刊，会員頒価3,100円， $\yen$ 350円
- 第43号 浅部マグマ溜りとその周辺現象の地球科学。村岡洋文ほか編，177pp.，1994年4月刊，会員頒価2,000円， $\yen$ 350円
- 第44号 島弧火山岩の時空変遷。周藤賢治ほか編，335pp.，1995年11月刊，会員頒価2,800円， $\yen$ 350円
- 第45号 ~~シーケンス層序学—新しい地層観を目指して—~~。斎藤文紀ほか編，**(売り切れました)**
- 第46号 火山活動のモデル化。佐藤博明ほか編，162pp.，1996年9月刊，会員頒価1,900円， $\yen$ 300円
- 第47号 日高地殻—マントル系のマグマ活動。荒井章司ほか編，323pp.，1997年4月刊，会員頒価3,000円， $\yen$ 350円
- 第48号 Cretaceous Environmental Change in East and South Asia (IGCP350) Contributions from Japan— 岡田博有ほか編，188pp.，1997年6月刊，会員頒価2,100円， $\yen$ 350円
- 第49号 21世紀を担う地質学。新妻信明ほか編，232pp.，1998年3月刊，会員頒価2,500円， $\yen$ 350円
- 第50号 ~~構造地質—特別号—21世紀の構造地質学にむけて—~~。狩野謙一ほか編，**(売り切れました)**
- 第51号 地震と地盤災害—1995年兵庫県南部地震の教訓—。岡田博有ほか編，162pp.，1998年3月刊，会員頒価3,000円， $\yen$ 350円
- 第52号 オフィオライトと付加体テクトニクス。宮下純夫ほか編，316pp.，カラー10pp.，1999年9月刊，会員頒価3,000円， $\yen$ 350円
- 第53号 本州弧下部地殻と珪長質マグマの生成・活動システム。加々美寛雄ほか編，401pp.，1999年11月刊，会員頒価3,900円， $\yen$ 360円
- 第54号 タフォノミーと堆積過程—化石層からの情報解読—小笠原憲四郎ほか編，197pp.，1999年12月刊，会員頒価2,900円， $\yen$ 350円
- 第55号 ~~ジュラ紀付加体の起源と形成過程—~~木村克己ほか編，**(売り切れました)**
- 第56号 古領家帯と黒瀬川帯の構成要素と変遷過程。高木秀雄ほか編，253pp.，2000年3月刊，会員頒価2,900円， $\yen$ 350円
- 第57号 碎屑岩組成と堆積・造構環境。公文富士夫ほか編，240pp.，2000年9月刊，会員頒価2,800円， $\yen$ 350円
- 第58号 ~~地震イベント堆積物—深海底から陸上までのコネクション—~~藤原一治ほか編，**(売り切れました)**
- 第59号 沖積層研究の新展開。井内美郎ほか編，212pp.，2006年5月刊，会員頒価2,400円， $\yen$ 350円

### リーフレットシリーズ

- 大地の動きを知ろう—地震・活断層・地震災害— 1995年4月発行 会員頒価200円（非会員300円）
- 大地のいたみを感じよう—地質汚染Geo-Pollutions 1997年2月発行 会員頒価200円（非会員300円）
- 大地をめぐる水—水環境と地質環境— 2001年5月発行 会員頒価300円（非会員400円）
- 日本列島と地質環境の長期安定性 2011年発行 会員頒価500円（非会員600円）

### 地質リーフレットたんけんシリーズ（同一リーフレットを20部以上購入の場合割引あり）

1. 箱根火山たんけんマップ—今、生きている火山 2007年5月発行 会員頒価300円
2. 屋久島地質たんけんマップ—洋上アルプスは不思議な地質がいっぱい— 2009年3月発行 会員頒価300円
3. 城ヶ島たんけんマップ—深海から生まれた城ヶ島— 2010年9月発行 会員頒価300円
4. 富士山青木ヶ原溶岩のたんけん—樹海にかくされた溶岩の不思議— 2014年3月発行 会員頒価300円
5. 長瀬たんけんマップ—荒川が刻んだ地球の窓をのぞいてみよう— 2016年2月発行 会員頒価300円

### 地質リーフレットシリーズ

1. 箱根火山 2007年7月発行 会員価格1,000円（同一リーフレットを20部以上購入の場合割引あり）

下敷き：「干渉色図表」・「偏光顕微鏡による鉱物鑑定表」（英語版）1枚200円（非会員300円）

### 電子書籍シリーズ

地学を楽しく！：ジオパーク・ジオツアー・地学オリンピック 2013年12月発行 [Kindle版/PDF版] 定価1,380円

### 講演要旨集ほか

- 第118年見学旅行案内書（2011年水戸） 会員頒価2,800円， $\yen$ 500円
- 第117年学術大会講演要旨（2010年富山） 会員頒価4,000円， $\yen$ 500円
- 第117年見学旅行案内書（2010年富山） 会員頒価2,800円， $\yen$ 500円
- 第116年見学旅行案内書（2009年岡山） 会員頒価2,800円， $\yen$ 500円
- 第115年見学旅行案内書（2008年秋田） 会員頒価2,500円， $\yen$ 500円

※このほか、大会講演要旨は、2002年新潟、2003年静岡、2004年千葉、2006年高知、2007年札幌、見学旅行案内書は、2004年千葉、2005年京都に残部があります。

フィールドノート：学会オリジナル。12×19cm。ハードカバー。レインガード使用 会員頒価1冊500円。

クリアファイル：学会創立125周年記念オリジナル。A4対応両面カラー。3枚1セット500円。



## 広告募集

# ニュース誌に広告を掲載しませんか？

ニュース誌の掲載広告を募集しています。学会直接取り扱いになりますので、カラー印刷・掲載サイズなどご相談に応じます。是非ご利用ください！

	価格(白黒)	版下作成	カラー印刷
表4	60,000	+10,000	+10,000
表2	50,000	+10,000	---
表3	40,000	+10,000	---
本文頁	35,000	+5,000	---

(単位：円)

【お得な割引価格も設定しています！！】

掲載位置・サイズにかかわらず、

4回掲載一括注文：10%割引

6回掲載一括注文：15%割引

※一年度内(4～3月)もしくは一卷内(1～12月号)で一括注文頂いた場合に限りです。

申込・問い合わせ：一般社団法人日本地質学会 事務局

電話 03-5823-1150 FAX03-5823-1156

e-mail: main@geosociety.jp



## 広報誌ジオルジュ 一括割引購入のご案内

日本地質学会では広報誌「ジオルジュ」を発行しています(年2回発行、定価250円)。

博物館・学校・研究機関などで、イベントでの配布物、友の会へのプレミアグッズ、ストアなどでの販売物として、ジオルジュを利用してみませんか。部数に応じて割引価格を設定しておりますので、是非ご検討下さい。

### 【割引価格例】

100部：20,000円(定価2割引)

300部：52,500円(定価3割引)

これ以外についてもご希望に応じてご相談承ります。

毎号各地のジオパークの特集記事の掲載も企画しています。ジオパークの広報の一環としてもご活用ください。

申込・問い合わせ：一般社団法人 日本地質学会

電話 03-5823-1150 FAX03-5823-1156 e-mail: main@geosociety.jp



最新号(2017前期号)発行!



